

---

# トリコ チートを持った転生者

アルトアイゼン・リーゼ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トリコ チートを持った転生者

### 【Nコード】

N7324V

### 【作者名】

アルトアイゼン・リリーゼ

### 【あらすじ】

大学に通う青年

彼は家に帰る途中に死んでしまう  
だが神に会い異世界に行く事になる  
彼はどんな明日えお生きるのか？

## 異世界へ

俺は何処にでもいる大学1年生だ

一応県内トップクラスの大学に通っている

俺は考え事をしながら道を歩いていた

「うーんどうするかな、やっぱりパックをまとめて買おうかな？」

俺は遊戯王のパックの調律がほしくて買つか買わないか悩んでいる

「やっぱり調律がないとジャンクデッキが完成しないだよな」

俺はそんな事を考えて家に向かっていた  
するといきなり携帯が鳴った

「もしもし？」

「あ、お兄ちゃん 今日早めに帰ってきてね 今日私特製のハンバーグだよ」

「そうかもう直ぐ着くから大丈夫だよ」

「じゃあ楽しみにしててよ」

ピッ

電話を切る

今の会話で分かると思うが今のは俺の妹だ  
たつがみ ゆうな  
龍神優奈

俺のたった一人の家族だ

俺の両親は俳優で海外に撮影に向かっている飛行機が事故を起こし死んだ

その時、優奈はずっと泣き続けた

俺だって泣きたかったけど俺は泣いてしまったら  
もう立ち直れない気がした  
そうしたら優奈はどうなる？

だから俺はずっと優奈が自分で幸せを掴むまでそばに居ようと誓った

・・・失礼暗い話をしてしまった

生活は両親が十分生きていけるだけの財産を残してくれたので生活費には困っていない

まあ小遣い稼ぎにバイトはしているが

優奈は外人である母の血を強く引いており

金髪の髪に茶色の瞳、年は11歳

大人しくて少し茶目っ気のある小学5年生だ

容姿は・・・リリカルなのはのフェイトを想像してもらえばいいだろう

そして料理がとても美味しい

特にハンバーグは絶品だこうして話していると  
少し早足になってきた

「ふふふ、楽しみだ優奈のハンバーグ できれば沢山食べたいな」

だが俺の願いは叶うことはなかった

青になった信号を確認し横断歩道を渡っていると

横からパトカーに追われた車が迫ってきた

そこで俺の意識はブラックアウトした

・・・俺は死んだのか？

「死んだとは言えませんか」

声がしたので目を開いてみるとそこにはカッコいい男性がいた

「貴方は？」

「私ですか？私は貴方達で言う所の神ですな」

「え！！？」

俺は目を限界まで見開いた

「そ、そこまで驚かなくても」

「無茶言わないでください！！！目の前で神がいたらびっくりしますって！！」

「・・・失礼しました、取り乱してしまつて・・・」

「いえ御気になさらず」

「（神様がこんなに腰低くていいのかな？）

「これは私の性格です」

「！？声に出てました！？」

「いえ読心術が使えるだけです」

「そ、そうなんですか・・・すみませんが質問してもいいですか？」

「いいですよ」

「俺は・・・死んだんですか？」

「はい」

はつきりと神は言ってきた

その言葉が俺の心を抉る

優奈を一人にしてしまった・・・

俺は泣きそうになった

「でも貴方はもう一度人生をやり直す権利があります」

「え？」

「貴方は生前、妹さんの支えになるためいろんな事をしていましたね  
その事は多大に評価できます、それに貴方は困っている人がいれば

救いの手を差し伸べてきた  
それが理由です」

俺は神の言葉で希望が出てきた

「ほ、本当ですか!？」

「ええ」

「じゃ、じゃあ俺を生き返らせてください!!」

「・・・それは無理です」

「・・・え?・・・」

俺の希望が完全に撃ち砕かれた

「死んだ人間が同じ世界に行くのは無理なんです、すみませんでも  
貴方の願いは叶えてあげます」

願いつて・・・俺の願いは生き返ることだって・・・願い・・・!?

「じゃ、じゃあまず妹の願いをかなえてあげてください!」

神は驚いたように聞いてきた

「妹さんの願いをですか？」

「はい、あいつは俺が幸せになるまで俺が守るつもりでした、でも  
それはできない

だからせめて優奈には幸せになってほしいです」

「優しいですね、分かりました後貴方が行く世界はトリコですよ」

「え!?!でもあれって漫画じゃ・・・」

「あれはどちらかと言えばパラレルワールドですだから可能ですよ」

そうなのかも危険だよなあそこ・・・

「じゃあ身体能力はMAX俺の知ってるアニメ、漫画、ゲーム、小説の技、力が全て使えて

イメージしただけでその姿になれる変身能力

後どんな怪我や病気も心の病もどんな物でも治療、修復できる能力をください」

「うんわかった転生したら使えるようにしとくよ、じゃあ扉を開くよ」

「扉？」

神がそう言うその後ろにでっかい扉が現れた

「さあ行ってきた、原作ブレイクしていいから、妹さんの事は任せて！」

「お願いします」

俺は深く頭を下げ扉に入った

## V S ガラワニ

俺は神が開いた扉を抜けるとそこは森だった  
風が気持ちいい

ここは何処だろう？

俺はとりあえず人を探して歩き始めた

・・・何処まで行っても木ばかり  
当たり前か森だし

「でも軽く2時間は歩いてるのにぜんぜん疲れないな、あれかグル  
メ細胞か？」

なんて思っていると沼に着いた

「ちょうどいい少し休憩するか」

俺は沼の近くに座った

「にしてこれからどうするかなあ、いくらチート持ってたって経験  
がないからなあ・・・優奈元気にしてるか・・・」

妹が元気でやってるか心配だ

その時！

シャロロロ・・・バキ！ゴキ！モキヤ！ゴキヤ！

「へ？」

後ろを向くとガラワニが沼蛇を捕食していた  
骨を噛み砕き肉を食いちぎりながらこちらに向かっていた



沼蛇ぬまへび

沼の泥中に身を潜めている巨大な水蛇

そのため、発見が非常に困難であり、沼蛇に攻撃の意思がある場合、高確率でファイ打ちを食らうことになる

沼の中に限ってはガララワニといえど、うかつに手を出せない。

生息地：沼の中

体長：20メートル

体重：9トン

価格：100g/7000円

沼のような濁った水域を好んで棲息する蛇の一種

警戒心が強く、あまり水上に出ないため、捕獲レベルも戦闘能力に比べ、割高に設定されている

蛇の一種だが、一部脂がのった部位は、ウナギの味に似ているため、蒲焼にする旨いと評判である

捕獲レベル：5

分類：爬虫獣類

ガララワニ

真紅の鱗に覆われた巨大な多足ワニ

世界最高ランクのワニ肉として知られる

その捕獲レベルの高さから、通常の手段での食材調達は困難

非常に力が強く、76ミリの鉄筋を割り箸のようにへし折るほど夜行性なので、狩りは動きの鈍い昼間に行うのが定石

モモ肉など部位によっては小売でkg単価50万円は下らない

I G O がトリコに捕獲を依頼した際の報酬提示額は、k g 単価20万円（500 k g の個体で1億円）だったが、トリコは倍のk g 単価40万円を要求した

通常150年近く生き、加齢と共に食欲や獰猛さが強くなり、危険度が増す

通常は淡水の湿原に棲むが、海水にも適応可能。繁殖力が弱い反面、個体の寿命が延びてきているというデータもある

生息地：湿原・沼

体長：18メートル

体高：4.2メートル

体重：13トン

価格：部位によって違うが、モモ肉は100 g 5万円

バロン諸島の生態系の頂点に君臨する巨大なワニ

繁殖能力は低いが、その分、生存力が強く、種の中には300年以上生存する個体もある

一般的に鳥肉に近い味だと言われるワニ肉だが、長年生きて成熟したガララワニの肉は、最高級のブランド和牛のサーロインにも匹敵する脂のノリと旨みがあるという

今まではハンティングする以外に捕獲する方法はなかったが、近年I G O がクローン生産に成功したため、近いうち大量生産も可能になるだろう

捕獲レベル：5

分類：爬虫獣類

「おいおいガララワニって此処バロン諸島かよ！」

「シュ〜〜カロロロガロオ〜〜!!!!」

ガララワニは尻尾で地面を叩きつけその反動で突進してきた

「うわ！」

なんとかダッシュで射線上から退避して避わす

「あぶねーさでどうするか・・・

1 戦う 2 逃げる 3 やっぱ戦う・・・何だやっぱ戦うつて・・・

まあいいか力を試すいいチャンスだ、行くぜ！剃！」

六式の剃を使いガララワニの横っ腹に回り込む

「行くぜ！せえい！」

腹に超高速で連続でパンチを決めていく

「白虎咬！！おりゃあ！」

最後に手にエネルギーを収束させてそのまま腹に決めたガララワニは吹き飛んだが空中で態勢を立て直し着地した

「・・・白虎咬じゃあまだパワー不足かなら！」

俺の両腕にソウルゲインの腕をアーマーとして出現させる

「狙いは外さん！」

腕が高速回転を始める

「ロケット・ソウルパンチ！もとい玄武剛弾！」

ついアホセルで言ってしまった  
アーマーのみを飛ばし顔を殴る

「ガロオオオ！！！」

苦しんでるな

「止めだ！」

右腕だけ回転させ脳天を殴りつけた

「カロ・ロオオ・・・」

ドシン！！

「ふうガララワニお前の命頂きます」

俺は早速周りの木の枝を薪にしてガララワニを焼き始めた

「うーんいい匂い！そういえば俺にグルメ細胞ってあるのかなあ？  
ライブラ！」

うーんライラブで探してるけど・・・あった！

やっぱグルメ細胞あるのか、トリコ並みに食べなきゃダメなのかな？

「お！焼けたー！まずは食事だ！いっただきまーす！あむっ」

クチュ、モグモグ、ゴクン

「うめゝ！！舌に乗せるだけで肉汁が溢れ出てくる！そしてしつとりとしつつこの歯ごたえ！うまゝい！！やばい止まらない！やみつきになりそうだぜ！」

俺はそのままガラワニを食い続けて骨になるまで食い続けた

「ぶふいゝゝ美味しかったなゝこれなら一切れ10万相当する理由も分かるなさてグルメ界で修行でもするかな」

俺は翼を出してグルメ界の入り口、ザーベル島の命の滝壺に向かった

いざ！グルメ界へ！

俺はグルメ界の入り口のザーベル島の命の滝つぼに飛び込もうとしていた

「ここから落ちて死んだら洒落にならないな・・・確か次郎は此処が一番入りやすいって言うてたけど本当か怪しいな」

俺は覚悟を決める事をした

「よし！龍神　龍人行くぜ！」

俺は腹を括って滝つぼに飛び込んだ

凄いスピードで降りていくというか落ちていく

ビュオ~~~~！！！！

ん？地面？やべ！このままだとぶつかる！

「髪<sup>ヘア</sup>ネット！！」

地面すれすれで髪ネットで勢いを殺し着地に成功した

「にしても体が重いな〜あれだけ降りたから重力が強いのかな？」

此処はアングラの森

命の滝壺の入界ルート入口にある森

人間界から見て、海拔がマイナス2万メートルの場所に存在する。

地上より地球の核に近いため、その影響で重力が強く作用している。  
トリコですら歯が立たない凶暴な猛獣や、人間界の常識を超えた不

思議な植物も数多く存在する

すると後ろから何かが迫ってきた  
デビル大蛇だ

「ギオゝアゝアゝオゝギャアゝアゝ！！！」

デビル大蛇<sup>じゅうりゅう</sup>

地獄から来た魔獣、と呼ばれる伝説の魔獣

太古の昔、最強と謳われたバトルウルフと肩を並べたと言われる  
トリコの威嚇、ココの毒をも恐れず、爆音にも動じない

紫色の皮膚・髪の毛と、漆黒の牙・爪を持つ多足の大ヘビ

体全体が伸縮自在なので、攻撃を予測しづらく、間合いをはかるこ  
とも困難。また、皮膚を限界まで縮めることで、硬度と耐久力を上  
げて身を守ることができる

鳴き声は「ロゝロゝロゝロゝ」

「ギオゝアゝアゝオゝギャアゝアゝ」という凄まじい雄たけびには、  
精神力の低い者の意識を混濁させる効果がありそう

口からは強力な消化液を吐き、足を切り落とされても瞬く間に再生  
させてしまう

髪の毛からは毒液を分泌し、飛ばすことも可能だが、獲物の体に直  
接、毒針のように打ち込むこともできる

全方向を見ることが可能な3つの眼と、顔中に点在するピット器官  
により、暗闇の中でも獲物を見失うことはない

生息地：暗い洞窟の中

体長：35メートル～40メートル

体高：-

体重：17トン

価格：100g/15万円

地獄から来た魔獣と恐れられる大蛇  
熱で獲物の位置を感知するピット器官や、獲物を仕留めるための飛び道具の猛毒など

暗闇での闘いはかなり苦戦を強いられる

また、デビル大蛇自身がダメージを受けても瞬時に肉体が再生する細胞、万能細胞で構成されているため、捕獲するには万能細胞ごと破壊する強力なダメージを与えるか  
高度なノッキングを行う必要がある

洞窟の砂浜にいたデビル大蛇は、捕獲レベル21だが、地球のどこかには、もっとレベルの高いデビル大蛇が生息しているというウワサもある

捕獲レベル：21

分類：爬虫獣類

「きつしよー！！」

サニーみたいな事を言ってしまう  
だってマジでキモイだもん

「□□□□！！！」

「うるせーよ！！」

コイツの声はめちゃくちゃ煩い耳がー！！

「ギオゝアゝアゝオゝギャアゝアゝ！！！」

という凄まじい雄たけびを上げて突撃してきた



「クツ！剃！」

剃で避わしたがピット器官で俺の位置を把握したのか手を伸ばし足を掴んで投げ飛ばされた

「ぐっ！くっそ！青龍鱗！」

手にエネルギーをため青龍鱗を放ち腕を吹き飛ばすが瞬く間に再生されてしまった

「くそ！このままじゃあ・・・」

「ギョッ！アッ！オッ！！！」

こちらに向かってくるデビル大蛇

「こうなったら！リミット解除！おっりゃ！！」

ジャンプをし青龍鱗を一気に連射する

煙でデビル大蛇が怯んだ隙に一気に距離を詰め

連続でパンチとキックを決め続ける

アップパーを決め大蛇を殴り上げる

「コード麒麟！！」

すでに展開してあったソウルゲインの腕の肘ブレードにエネルギーを纏わせ大蛇に向かってジャンプする

「決める！おりゃ！」

デビル大蛇を尾から一刀両断する

なんとかデビル大蛇をしとめることに成功した

「俺もまだまだな」

俺は此処で修行する事で高みを目指す事にした

## 美食屋

さて改めまして自己紹介だ

俺の名前は龍神たうがみ 龍人りゅうと

俺はグルメ界で修行を始めて7年、俺は25歳になった

グルメ界はもう俺にとって快適な所になってきた

最初は天候やら猛獣やらで死ぬと思ったけど

そして・・・とんでもないのが俺に懐いちゃった

デーモンデビル大蛇・・・

デビル大蛇の亜種で捕獲レベルは25

俺がご飯の調達に行った時に

阿修羅タイガーに襲われていたので助けたら懐かれてしまった

こいつ見た目はおっかねゝのに結構な甘えん坊だ

だが腕は一流最近

では推定捕獲レベル85のジャックエレファントを倒せるまでに成

長した

なかなかいい相棒だ

少し不気味だがな

因みに名前はジャコウ

「ジャコウそろそろ人間界に戻るけどお前も来るか？」

「ギョルル？」

「どうする？これからビオトープに行つて美食屋になろうと思うんだけど？えっと確か第8でやってた気がする」

「・・・」

ジャコウは何本ある手を組んで考えている

人間くさいなジャコウ・・・

「ギャオルルル!!」

「お!来るか!?!」

ジャコウは勢いよく首を縦に振った

「よし行くか!」

「ギオゝアゝアゝオゝギャアゝアゝ!!!!!!!!」

ジャコウは雄たけびを上げた

「だあゝゝ!!!!!!うるせゝゝ!!!!!!耳がゝゝゝ!!!!!!」

俺はジャコウと共に第8ビオトープに向かった

その途中・・・

「ギユルル」

「ん?どうした?」

ジャコウは自分の頭の上を指で指す

「????乗れってことか?」

「ギユル」

「分かった分かった」

俺はジャンプしジャコウの頭の上に乗って第8ビオトープに向かった

.....

――――第8ビオトープ――――

ビオトープガーデン

通称「庭」

I G Oが動植物の生態調査や繁殖などを目的として世界各地に建造したビオトープ兼超巨大養殖場兼実験場でそれぞれが島1つ分の広大な敷地面積である

中でも第1ビオトープに当たるリーガル島は50万k m<sup>2</sup>（北海道の約6倍）もの面積を誇っているらしい  
また、周囲を分厚い壁と堀で取り囲むなど、猛獣が逃げ出さないための措置をとっている

トリコ達四天王のかつての修行場でもある。ここの食材を無許可で庭の外に持ち出すことは重罪とされている  
様々な動植物の繁殖に成功してはいるものの、その中には危険な種類も多く

それらの採取・捕獲の手段は確立されていないのが現状のようで、庭の中の食材の捕獲のために美食屋に声がかかることもある

「にしてもでかいな」

「ギョル」

第8ビオトープ通称「庭」の目の前に俺達はある  
ここで美食屋になるためのテストが行われている

「よし行くぜ！ジャコウ！すつすめ」

「ギョァァァオ！！！」

ジャコウに乗ったまま入っていく

## 第8ビオトープ研究所内

ここでは試験の準備が行われていた

職員がガラスから会場を見ている男に話しかける

「ママママツマンサム所長くっ！！！！！」

「なにい！ハンサムっていった！？」

「言ってますん！！」

職員は勢いよく手を顔の前で横に振る

マンサム

I G O 開発局長兼グルメ研究所所長

I G O では会長・副会長に次ぐ実質的なナンバー3の存在と言われている

細かいことにはこだわらない豪放な性格で、名前を呼ばれるたびに「今ハンサムと言った？」

と聞き返したがるが、まわりの人間からは即座に否定される

大変な酒豪で、常に酒の入った瓶を持ち歩いており、フルコースも全て酒に関係したものである

トリコにも劣らぬ筋骨隆々の体格をしているスキンヘッドの中年男で、超人的なパワーを誇る格闘術の達人

得意技は力任せに相手をぶん殴る「フライパンチ」

両手でのフライパンチで相手を挟み込む「フライパンサンドイッチ」痛覚を麻痺させており、腹や喉元を貫かれたりしても何事も無かったかの様に振る舞う

また、両肩をノッキングすることで筋肉を肥大化させるといった肉体操作も可能なようである

「で何じゃいったい？」

「はっはい、試験の事でお伝えしたい事が……！」

「なに！？ばっはっはっはっは……！！いい奴でもいたか？」

これは名目上は美食屋の認定試験だが

裏ではトリコを始めとする四天王の修行相手

美食會の敵と戦えて捕獲が難しい食材を調達ができる

有力な人物を探さすためでもある

「そそれが！途轍もなく大きい蛇に乗った青年が試験を受けると！  
！」

「蛇？ばっはっはっは……！！そいつは期待できそうだな！おっし！  
見に行くぞ！」

「はっはい！」

マンサムは試験会場へと向かった

――――試験会場――――

「おゝ広いな」

「□□□□」

俺の目の前には大勢の美食屋希望者がいる

「ん？ぎゃ……！！……ななな、何だあのでっかい蛇……！！」

まあ驚くの当然か

「あ、あれって伝説の魔獣！デーモンデビル大蛇だ……！！！」

「なんでそんなのがここに!!」

「おい見ろ! 頭の上に人がいる!!」

「ほんとだ!!!」

とにかく周りは騒がしかった

「ぬお!! あ、あれはデ、デーモンデビル大蛇! でかい蛇っていうのはあれだったのか・・・

にしてもあの頭に乗っている小僧デーモンデビル大蛇に懷かれてるな、甘えとる」

視線の先には龍人が頭をなで気持ちよさそうにするデーモンデビル大蛇の姿があった

「それにしたいしたもんだあの伝説の魔獣と謳われているデーモンデビル大蛇に懷かれているとは・・・

ばっはっは!!! 面白い奴が来たもんだ! おい! 試験が終了したらあいつに会いに行くぞ!」

「はっはい!」

マンサムは試験を前にして映画を楽しむように嬉しそうに微笑んだ

「ではこれより試験を始めます、合格方法は簡単、制限時間内に猛獣を一匹でも倒すか

制限時間以内に逃げ切れれば合格となる

では私が出たら試験が始まる、諸君の食運を祈る!」

職員は会場から出て行った

「まずは様子見だな」



「ギョルル」

そして試験は始まった

ところが・・・

「うわぁ~~~~!!!!」

「ぎゃぁ〜!」

「た、助けて・・・」

う〜ん・・・カオスだなこの状況

猛獣に追われる者

断末魔をあげて食われる者

倒される者

「さてそろそろ行くか、ジャコウはここで待ってな」

「ギョウウウウ」

え〜みたいな顔をする

「これは俺の試験なんだから分かった？」

「ギョ〜」

ジャコウは渋々承諾してくれた

「ついに動くかあの小僧待ちくたびれたぞ」

マンサムは酒を飲みながら龍人を見る

俺は猛獣が群れている所につつま

「行くぜ！デストロイナツクル！！！」

連続でパンチの衝撃波を飛ばし猛獣たちを仕留めていく

「おお！！衝撃波を飛ばすとはなあ！ばっはっはっはっは！！！！面  
白い奴だ！！！」

気がつく制限時間は過ぎ試験は終わった

俺はジャコウの頭の上に乗り返ろうとしたら

「ちょっと待てい！」

止められた

「ん？なんですか？」

「わしはマンサム、合格おめでとう！どうだデーモンデビル大蛇を  
見せてくれた礼にこれからどうだ！宴会でも！」

「マジッすか！？こいつもいいですか？」

俺はジャコウを指差す

「ああもちろんいいぞ！！だたしでかいから外でやるぞ！」

「やった〜！！！」

「ギョゝアゝアゝオゝギャアゝゝ！！！！！」

「だからうるさいっての！！！！！」

## 酒尽くしのフルコースと師匠

俺は今マンサム社長のお言葉に甘えて宴会に参加している  
もちろんジャコウも一緒だ

目の前には大量の料理が並んでいた

「おお~~~~!!!!」

「ギョルルル」

「ばっはっはっはっは!!! さあどんどん食べ! 大量にあるから遠慮するなよ! わしのフルコースを全部出してやる!」

「所長のフルコースってなんですか?!」

「オードブル 酒盗エスカルゴ! スープ 酒貝のスープ! 魚料理 バッカスシャーク! 肉料理 酒乱牛! メイン バッカスドラゴン! サラダ バッカスオニオン! デザート 酒豪メロン!

ドリンク バッカスホエールの潮だ!」

「すっげえ〜! バッカスドラゴンって超高級食材じゃん!!」

酒盗エスカルゴ (しゅとうえすかるご)

捕獲レベル: 28

酒貝のスープ (しゅかいのすーぷ)

捕獲レベル: 25

酒豪メロン (しゅかうめろん)

捕獲レベル: 19

バツカスシャーク（ばつかすしゃーく）

捕獲レベル：31

バツカスオニオン（ばつかすおにおん）

捕獲レベル：15

バツカスホエールの潮（ばつかすほえーるのしお）

捕獲レベル：33

トリコデータベースに詳しい事が乗っていなかったなので捕獲レベルのみ

バツカスドラゴン（ばつかすどらごん）

バツカス島の主であるドラゴン  
超高級食材として知られている  
その肉はアルコールを含み、まるでブランデーのような芳醇な味わい

生息地：バツカス島

体長：48メートル

体重：22トン

価格：100g/18万円

酒の樂園と謳われるバツカス島の主として君臨する竜  
アルコールを含んだ肉は芳醇なブランデーを思わせる味として有名である

ちなみにバツカスドラゴンは全身にアルコール分を含んでいるため、  
20歳以下は食べることを禁止されている

まさに子供にはわからない「大人の味」と呼ぶに相応しい食材である

捕獲レベル：37

分類：翼竜獣類

しゅらんぎゅう  
酒乱牛

アルコールを多分に含んでいる（と思われる）極上の肉

食べた者を酒に酔わせ、味に酔わせ、その相乗効果で酩酊させる

生息地：バツカス島

体長：9メートル

体高：3.5メートル

体重：8トン

価格：100g/2万5千円

バツカス島に生息し「酔いどれ暴れ牛」と異名をとる哺乳獣類

バツカス島のアルコールを含んだ湖の水を飲料水としているため、  
常に酔っ払ってフラフラしているか、酔えば酔うほど凶暴さが増す

厄介な牛

捕獲レベル：30

分類：哺乳獣類

俺は酒乱牛に手を付けた

「美味しい！何これ！？サーロインの旨みと日本酒のまろやかさその両方を備え持つみたいだ！」

マンサムはビアロブスターにかぶりついた

ビアロブスター（びあるぶすたー）

殻の中には、ぷるぷるの身がつまっている  
ビールのツマミに最適

生息地：温暖な海域

体長：55cm

体重：2kg

価格：1匹／9万円

伊勢海老の一種でアカザエビ科

温暖な海域に生息し、その身はプリプリと引き締まって歯ごたえ抜群  
味はそのままでも天然の塩気がきいているため、その名の通りビールのツマミにピッタリの食材である

捕獲レベル：1以下

分類：甲殻類

「うーんこのプリプリ歯ごたえ！この塩加減！美味しい！！酒が進むわい！」

マンサム所長はジョッキに注いであったビールをがぶ飲みした

「ギョルルルルル」

「美味しいな」

「あゝそつだお前な名前は？」

「龍神 龍人です」

「龍神か、良い名だ、龍人はこれからどうする気だ？」

「うーんとりあえず修行でもしようかなーって考えてます」

「ではいい師匠を紹介してやろう」

「え？誰ですか？」

「IGO会長　一龍さんだ」

「えー！！！！会長って！！？」

「ギユル？」

一龍会長といえはこのグルメ時代トップに立つ人間といっても過言ではない

「なんでそんな人が俺の師匠に？」

「試験の事を上に報告したら会長がお前さんに興味を持ったんだ」

「あつなるほど」

「明日にでも行つて来い！」

「明日！？」

「早いほうがいいだろう？」

「まあそうですね」

「おっし！そうとなれば乾杯だー！！！」

「さつきからずっと飲んでるじゃないですか？」

「細かい事は気にするな！ばっはっはっはっは！！！」

その後一日中宴会は続いた・・・

次の日

俺は所長のご好意で会長のいる家まで送ってもらった

周りはガラスのように澄んだ海に囲まれた小さく別荘って感じだ

俺はインターホンを押す

ピンポン

すると中から小柄な男が出てきた

「これは！これは！お待ちしておりました龍人様！ささ会長がお待ちですどうぞ此方へ！」

俺は案内されるまま歩いた

するとテラスについた

なんかパラソルが建ってるな

「あそこに居られるのが会長で御座いますでは私はこれで」

男は下がった

「・・・（まずは挨拶だな）お初にお目にかかります会長、俺はじやなくて！」

私の名前は龍神 龍人と申します」

「おお、お主が龍人君か？」

「はい」

パラソルの下のいたのは国際グルメ機関IGO会長 一龍さんだった

いちりゅう  
一龍

IGO会長

トリコ達「四天王」の師匠で、彼らの親代わりでもあった模様（トリコは一龍を「オヤジ」と呼んでいる）

見た目は派手でお調子者だが、弟子達の事を絶えず気にかける深い思いやりを持った老人

約500年前に美食神アカシアの一番弟子であったと語っており、

正確な年齢は不明

すでに美食屋を引退している身であるが、その驚異的な身体能力と



戦闘力はいまだ衰えていない

トリコが「四天王」と呼ばれるようになった今でもトリコを完全に子供扱いしており

アイスヘルでの死闘を乗り越えてパワーアップしたトリコの全力の技を簡単にあしらうほどの強さを誇っている

GODの出現がアカシアの予想通りに新たな戦争を招くであろう事態を危惧し、戦争の勃発を事前に阻止するため、自らの命を賭けて最後の使命に臨もうとしている

見た目はチーターのような模様のシャツを着てサングラスをかけている

・・・<sup>ファンキー</sup>派手だな

「マンサムの話だとデーモンデビル大蛇を相棒にしていると聞くがどこじゃ?」

「グルメ界です」

俺は即答した

「ほう、グルメ界で」

「はい、ジャコウは俺が食量の調達をしている時に阿修羅タイガーに襲われていたのを助けたら

懐かれたんです」

「なるほどのどの程度強いかの?」

「えーと・・・ジャックエレファントを簡単に倒せるまでに成長しました」

「!ほう・・・捕獲レベル85をのゝ因みに君をどの程度グルメ界にいた?」

「7年です」

「随分と長いな、では実力は十分というわけか・・・よし!」

会長は立ち上がり手のひらを俺に向けてきた

「？」

「お主の技を打ってみい」

「ここで？」

「そうじゃ遠慮はいらんぞ？」

「では・・・」

俺は集中し右腕に力を込め武装色の覇気を右腕に纏わせ腕を高速回転させる

「ほお！腕を高速回転させる事ができるとはな」

「うおー！！玄武金剛弾！！」

玄武剛弾の強化版を会長の手に決める  
だが手は10数センチほど後ろに下がったただけだった

「ほう！！トリコの釘パンチを遥かに上回るほどの威力だ」

「うつそ・・・ぜんぜん効いてない・・・」

「少し堪えたぞ、腕が痺れてしまったわい」

「痺れただけですか・・・」

マジでシヨックだ

玄武金剛弾はジャックエレファントを一撃で粉砕するパワーなのに  
腕が痺れる程度とは・・・

「弟子になるには合格じゃこれからもっと強くしてやるぞ」

「はい！お願いしますー！」

「じゃあまずは第1ビオトープに行ってロックドラムを捕獲してき

てくれ」

「ロックドラムを？」

「後ピグマ、バラック、ドムもじゃぞ？」

「増えた！？」

「じゃあ龍ちゃん 頑張るんじゃぞ」

「はい……………」

俺は洪々第1ビオトープに向かった

## キャラ紹介

たつがみりゅうと  
龍神龍人

性別 男

年齢 転生前 18歳 転生後 18歳 グルメ界での修行終了時 25歳

身長 転生前 185cm グルメ界での修行終了時 218cm  
(グルメ界の食材が栄養が豊富だったため)

体重 転生前 69kg グルメ界での修行終了時 98kg 四天王の三人より軽い

容姿 上の上 性格が優しいためとてもモテた、だが男子生徒からは嫉妬の目で見られていた 服装は黒い長ズボン

腕や脇腹の部分に赤と黒の龍が描かれている服を愛用している

引用 技などはスパロボのソウルゲインの技をよく使う(人体でやりやすいから)

身体能力はMAX

能力は知っているアニメ、漫画、小説、ゲームの技、力が全て使える

イメージしただけでその姿になれる変身能力

どんな怪我や病気も心の病もどんな物でも治療、修復できる

能力

だが基本的にはソウルゲインの腕や剣などを作り出すだけ

ジャコウ

デーモンデビル大蛇

推定捕獲レベル 88 (ジャックエレファントを倒したため) 通常  
は 25

阿修羅タイガーに襲われていた時に龍人がご飯の調達をして  
いた時に助けられそれ以来龍人に懐いた

龍人のためなら危険を省みずに戦う

性格は甘えん坊

戦いとなると牙をむく

好物はホワイトアツプルとカニ豚、ピグマ、ブラックカーペ

ツト

グルメ界でも野菜を食べていた

龍人に頭に乗ってもらうのと撫でられるのが大好き

体長は 48メートル

体重は 19トン

通常のデーモンデビル大蛇より鋭いピット器官と牙と爪

3つの眼はともよく暗闇でココほどではないが見える

ダメージを受けても瞬時に肉体が再生する万能細胞を持って  
いるが

さらに龍人がグルメ細胞を与えた

頭を吹き飛ばされても再生することが可能となった

毒もココ並の毒を生成することができるようになった

皮膚も縮めなくてもトリコのナイフも傷ひとつ付かなくなっ

た

妹

俺は第1ビオトープから帰った後師匠の3ヶ月特訓を受けていた  
それで筋がいいといわれて3日間の暇を貰った

俺はグルメフォーチュンの近くの草原に寝そべっている  
ジャコウは俺の近くで眠っている

「・・・はあ、この世界に来てもう7年以上もたつのか・・・」

俺が死亡して神の手によってこの世界に来て既に7年に以上もの時  
が流れた

「にして大変だったな」最初はいきなりガララワニでその次は修行  
で行ったグルメ界でデビル大蛇に阿修羅タイガー

7年間もグルメ界で修行してそれから美食屋になって師匠の弟子に  
なっているんな食材とったり酒飲んだり師匠にボコられたり考えて  
みるといろいろな事があって死に掛けたり濃厚すぎる毎日だったな」

俺はよく今まで自殺しなかったな」っと思う

いろんな事があったけど一番の願いがある

絶対に無理な事だ

でも望んでしまう

「・・・優奈・・・」

妹に会いたい

自分で言うのも別にシスコンってわけじゃない

俺のたった一人の家族だ

だから会いたい・・・

？

「あれ？おかしいな？涙が出てきちゃったよ・・・そうか俺・・・寂しいんだな・・・」

ジャコウは俺の様子に気がついたのか顔を舐めてきた

「ジャコウ・・・ありがとな俺の相棒で居てくれてありがとな」  
「ギョルルル」

ジャコウは俺が笑うと安心したのかまた眠りに着いた  
すると後ろから誰か来た

やっべ、ジャコウみたら絶対に恐がるわ

その人は女性だった

外人を思わせる長く金髪 of 髪

茶色の瞳

まるでリリカルなのはのフェイトのような人だ

え？いやいやいやそれはないって

その人はジャコウよりも俺の顔を見ると驚いて泣き出した  
え！？俺なんかした！？

なに！？デーモンデビル大蛇のジャコウいるから！？

「お・・・い・・・や・・・」

声が小さくて聞き取れないな

「お兄ちゃん！！！！」

その人は俺にダッシュしてきて抱きついてきた

「え！？お、お兄ちゃんつて！！ま、まさか優奈！！??」

「うわあああん！！！！会いたかったよ！！！！龍人おにいちやん！！！！」

「おい！！本当に優奈なのか！！?」

「うん！！正真正銘のおにいちやんの妹の龍神優奈だよ！！！！！！」

優奈は泣きながら俺をもう二度と放さんばかりに俺を抱きしめてくる

「うわあああゝん！！！！うわあああゝ！！！！お兄ちゃん！！！！」

「優奈・・・優奈・・・俺も・・・会いたかった・・・」

俺も自然と優奈を抱きしめた

その状態のまま15分は経過した

「落ち着いたか？優奈？」

「うん」

「そうか・・・でもなんでお前がこの世界に・・・」

「お兄ちゃん死んじゃって目の前が真っ暗になったの、そしたら神様が私の願いを叶えてくれるって言うてくれたの」

「（神様・・・俺の願い聞いてくれたんですね・・・）」

「私はお兄ちゃんのそばに居たいいったのそれでお兄ちゃんに劣るけど能力を貰って13歳にしてみらってこの世界に来たの」

「なぜ13?」

「だって13歳にお兄ちゃんが良い物くれるって言うてたじゃない」  
「ああそついう事」

「それで優奈はまずは力を付けるためにグルメ界で能力を駆使して5年間修行したの」

「それで自信がついたから美食屋になって生活費を稼ぎながらお兄ちゃんの情報を集めてたの」



「なるほどな」

「でもぜんぜん集まらなかったの」

「そりゃそうさ俺は7年間グルメ界に居たんだから」

「そうなの？でもお兄ちゃんに会えてよかった本当に・・・グスッ」

「ホラホラ泣かないのこうやって会えたんだからいいじゃないか」

「うんでもこの7年間寂しかったよおおにいちちゃん！！」

もう優奈をひとりにしないでよお・・・

優奈の傍に居てよお・・・

おにいちやああん・・・」

俺は優奈の辛さと悲しさを理解した

俺はそつと優しく優奈を抱きしめた

「お、にいちちゃん？」

「優奈、お前はとうしようもない馬鹿だな、俺の傍に居たいから追ってきたあ？何言ってるんだよお前は？」

後先考えず行動するのはお前の悪い癖だな、だけどありがとう俺も優奈に会いたかった

どんなどんなに望んでもお前には会えないそんな現実には辛かったただ一人の家族に会えないなんて辛すぎる・・・

だけどこれからは一緒だ、一緒にご飯を食べよう、一緒に歩こう、一緒に居よう、お前が望むなら俺は優奈の傍にいる」

「本当？一緒にいていいの？」

「ああ優奈が望むならな」

「望むよ！お兄ちゃんと一緒に居たい！！」

「はいわかりました、後ジャコウ、何ニヤけてるんだよ」

ジャコウは俺たちのほうを向いてニヤニヤしている

コイツ本当に人間くさいな

「お兄ちゃんこの子デモンデビル大蛇だよね？なんでこんな所にいるの？」

「コイツはジャコウグルメ界であつた俺の相棒だ」

「へえゝ宜しくねジャコウ」

「ギョルルル」

「あはははお腹が減つたみたな鳴き声だね」

この後俺は師匠の所に出向き優奈を生き別れた妹と説明して弟子に  
してもらつた

やれやれこれからの人生大変そうだ、はあ・・・

ついに原作突入！虹の実を探れ！

師匠の下で修行を始めてすでに7ヶ月

ちよつと前までトリコ達の修行相手として俺は拔擢された

ゼブラは居なかったが

それにしても皆の素質は途轍もなく高かった

流石は四天王だ

トリコのナイフで腕が切断されようになっただし

ココの毒は神経毒で痛かったし

サニーはヘアロックしてきたりするし

まあとにかくと筋は良かった、まだまだけどな

俺と優奈は修行一区切りにすると言われて暫らくの暇を貰った

優奈はこの休みを利用してライフでのんびりすると言って出かけて

いった

一応癒しの国だしね

俺はとりあえず休み中の費用を稼ぐために沼蛇を捕獲しこのグルメ

市場中央卸売市場に来ている

沼蛇を売るためだ

すると人だかりができている

「なんだ？」

俺が顔のぞかせるとトリコがシャクレノドンを地面に下ろしていた

シャクレノドン

山奥の洞窟に棲むドラゴン

巢穴に骨が転がっていたことから、肉食と思われる

体重は約1トン

トリコはトムとkg単価3〜4万円で取引をしていたが通常のグルメ相場では、もっと高価のようだ

生息地：山岳地帯、崖

体長：5メートル

体高：3メートル

体重：1.5トン

価格：100g/9000円

山岳地帯や崖の洞窟などに棲息する翼竜獣類

顎がしゃくれているために「シャクレノドン」と呼ばれているが、そのユニークな名前とは裏腹に部位によっては卸値で1キロ6万円する高級食材でもある。肉以外にも骨から非常にコクが深い良いダシが出るため、シャクレノドンの骨からダシをとった「シャクレラーメン」は舌が肥えたラーメンマニアたちの間でも人気を博している

捕獲レベル：4

分類：翼竜獣類

「トリコ久しぶり」

「おー！龍じゃねーか！何だお前も来てたのか」

「ああ、沼蛇を捕獲してさ売りに来たんだ」

「でえー！？沼蛇ー！？捕獲レベル5！トリコさんが捕獲したシャクレノドンより上ですよー！？」

「相変わらずのノッキングの腕だな」

「まあね」

「凄い！捕獲レベル5の沼蛇を簡単に捕獲するなんてー！しかも力リスマ美食屋トリコもいる！なんててんこ盛りの美味しいユース！あんたがトリコね？私ティナ！」

「あ？」

「へ？」

「私グルメTVで世界のあらゆる食材を紹介するグルメキャスターなの！トリコ！番組で取材させて！そっちの貴方も！」

「俺？」

「勝手な取材は困りますね」

ヨハネスが取材を拒否しティナはどこかに連れて行かれた

「何もあそこまでしなくても・・・それにトリコさんこの人は？」

「ああコイツは龍神 龍人 IGO会長の弟子だ」

「え〜〜！！！！か、会長さんの弟子い〜〜！！！！？」

驚きすぎだろ小松君

「こんにちわ俺は龍神 龍人だ宜しくね」

「は、はい僕はホテルグルメでコック長をやらせてもらっている小松と申します」

「宜しくそういえばヨハネスなんでここに？」

「虹の実が実ったのでトリコさんに依頼を」

「なに！！？」

俺とトリコは声を合わせて驚いた

「に、虹の実！！気温や湿度に合わせて七色に変化すると言われて  
いる幻の木の実ですかあ〜〜！！？」

「ちょ！声がでかいぞ！誰かに聞かれたら・・・！」

虹の実（にじのみ）

気温や湿度によって七色に味を変える幻の木の実で、自然界では絶滅したと言われている

I G O が品種改良し、第8ビオトープで実をつけるのに成功したしかし、重さは900kgほどの実が地上数十メートルの位置に鈴なりに生るのだから、並みの美食屋では収穫すらできないだろう虹の実の香りを嗅いだ動物は、反射的に「食べたい」という欲求に支配され、命の危険をも顧みず、その実を食べようとする。理性を忘れるほどの魅力・魅惑は、恋のそれに近いという

25メートルプールの水に、ほんの一滴、その果汁を垂らすだけで、プール内の水がすべて濃厚で芳醇なジュースに変わってしまうほど果汁濃度が高い

適当な大きさに切り分けられた実から蒸発した果汁は虹を作り、目を楽しませてくれる。

プリンのようにやわらかいが、金のごとき重量感もある

実の温度を保つ際には5 が最適とされており、微妙な温度変化で味が変化する

完熟マンゴー数百個を凝縮したような糖度、レモンやキウイを凌駕する酸味、甘栗のごとき香ばしさなど、口内で7段階に味を変える爆発的な存在感は、「うまい」の一言に尽きる

現在はI G O による人工生産が可能

生息地：栄養豊富な土地（I G O 第8ビオトープ内）

体長：1メートル

体高：-

体重：1.5トン〜2トン

価格：1個／約5億円

絶滅したとの噂も流れたが、I G O ビオトープガーデンで生息している幻の果実

口にすると体内で味が七段階で変化し、空気中で蒸発した果汁は七

色の虹を架けることから、その名前がついた。虹の実は果汁一滴で25メートルプールほどの水を果汁ジュースに変えてしまうほど、高濃度のため、食べ過ぎると鼻血が出るので要注意  
また、果汁をリキュールで割って作る「レインボーカクテル」は、奇跡のカクテルといわれ、すべてのバーテンダーにとって羨望の的である

捕獲レベル：12

分類：果実

「問題があり収穫ができないのです、トロルコングが虹の木に巣をつくり近づけないのです」

「トロルコングウー!!!??」

## トロルコング

I G Oにより品種改良された、最強のゴリラ  
濃緑色の体毛と薄紅色の皮膚をもつ

4本の腕は、移動と攻撃を同時に行うことを可能にする  
肉は筋っぽく不味いらしい（トリコ談）

その食性は完全に肉食で、動物の肉しか食べない  
知能が高く、落とし穴を掘る・毒ヘビを投げつけるなど、獲物を罠にかけることもしばしば

トロルコングの群れは、頭トロルを中心とした完全な縦社会であり、頭トロルの制圧に成功すれば群れ全体を制圧することができる

生息地：主にI G Oビオトープ内

体長：-

体高：4.5メートル

体重：2トン

価格：100g/5500円

I G Oビオトープガーデン内に生息し、群れをなして生活する  
肉は筋ばって食べられたものではないが、脳ミソは独特の旨味で、  
一部の愛好家からは珍味として重宝されている

持ち前の腕力のほかに猿特有の高い知能を持ち合わせているため、  
戦闘では単純な打撃攻撃以上に、落とし穴や飛び道具攻撃などの狡猾な攻撃が厄介である

また、群れの中で明確な縦社会が確立されており、ボスの命令には  
絶対服従という掟が存在しているが、個々の個性も尊重（アーススタイルなど）されていて、  
どこことなく人間社会に近い集団である

捕獲レベル：9

分類：哺乳獣類

「捕獲の難しさが9！！？この前の300歳のガララワニが捕獲レベル8ですよ！！？」

「虹の実食ってみてし久しぶりに行くか懐かしき庭によ、龍も来るか？」

「じゃあ行こうかな？」

俺はトリコに同行して虹の实の捕獲に向かった

第8ビオトープに着いたら直ぐにトリコが威嚇のために壁に3連釘パンチで壁を壊し入っていった

「雨が降りそうだな」

「えゝ雨嫌いだよゝ」

「虹の实の木は高いから雷でも落ちたら大変だぜ」

「じゃあ急ぐか」



「はい！」

トリコがジャンプして着地するとボコッ！

「え！？」

「あ」

「落とし穴あ！！？」

すると上から岩が降ってきた

トルコングだ

小松君はビビッているので俺はファイティングポーズを取り玄武剛弾を放とうとしたらトリコがノッキングを行った

「おゝノッキングの腕あがつたね」

「お前ほどじゃねゝよけど舐められてにおいが染み付いちまったぜ」

この後は原作どうりにシルバーバックを手なずけた

「これが・・・虹の実・・・」

「ああさあ1個持って帰ろうぜ」

「そうだな行こう小松君」

「は、はい」

トリコが取ったらヨハネスが来てこっそり着いてきたティナを連行した

今はホテルグルメで食事をしている

「にしてもトリコよく食うな」

トリコの周りには皿が山盛りにされていた

「だって美味しいんだぜ？」

「まあわかるけどさ」

そして小松君が虹の実を持ってきてトリコが食べフルコースのデザートに決定した

「なあ龍、お前は食わなくていいのか？」

「ふっ捕獲したのはトリコお前だ、俺の分も食っていいぜ」

「おお！サンキュー！」

こうしてトリコは虹の実を堪能した

## 四天王ココ登場！

俺は今トリコと小松君と共に列車に乗っている

なぜかというところ今の時期に幻の魚フグ鯨が深海から浅瀬に上がってきて産卵をするからだ

その時だけが捕獲する事が可能で俺は興味本位でトリコ達に同行した今は酒を飲んでいる

「あゝうめゝ」

トリコは酒の入ったビンの中身を一気に飲み干した

「車内販売のお酒全部飲むつもりですか？龍さんだってそんなに飲んでないのに」

「いやゝ嬉しくてなゝもうすぐ幻の魚フグ鯨に会えると思うとよゝ！龍達もそうだろう！？」

「まあね」

「ええ！それはもちろん！深海の珍味といわれるフグ鯨が浅瀬に姿を現すのは10年に一度ちょうどこの時期だけですからね」

「淡雪のような繊細のフグの身と！脂の乗ったマグロの大トロ！そして鯨の肉を併せ持つ絶妙な味！

たまんねえゝ！！まあ小松は食うよりもフグ鯨を捌ける奴に興味があるんだろ？」

「わ、分かってましたか？」

「フグ鯨はたしか特殊調理食材に指定されてたな」

「ええ、フグ鯨の体内の毒袋を取り除くのは難しく特殊調理食材に指定されるほど」

フグ鯨（ふぐくじら）

深海の珍味と呼ばれる幻の鯨

卵からかえり成魚になるまで（3～4年）は浅瀬で過ごし、その後は深海で過ごす

肺とエラ両方を持ち合わせるフグ鯨は、浅瀬での3～4年で体長6メートルにも成長するが、深海へ移動する際、水圧で肺は潰れ、体長も30～40cmまで圧縮される

これにより旨みが凝縮され、最高の味を生むという

：ただし、それと同時に巨体を持つ大量の老廃物も同時に凝縮され、それが“毒袋”となるのだ

「皮」乾燥させると1世紀以上鮮度は落ちず保存できる

「身」ピンク色の身は、もち肌のようにしっとりとした歯ごたえ。

小売で100g92万円

「背ヒレ」フグ鯨特有のダシがとれる 毎日とっても約3年は新鮮なダシが続ける

「舌」上質な脂肪分が凝縮しており、熱するとサラサラの油に変化。丸1年は古くならず揚げ物でも繰り返し使える

「内臓」各種滋養強壮に効果あり 生で食べると、10日間、不眠不休で働いても疲れない程の精力が得られる

「ヒレ」超辛口の熱燗でヒレ酒にすると絶品 1杯で1週間はほろ酔いが続く

#### 毒袋

一度、破れると一瞬にして全身が毒化し、食べると30分～1時間

で死に至る

致死量 0.2 mg マウスにして10万匹を殺す猛毒

しかも個体により毒袋の位置が全く違うため、完璧に破かずに除去できる料理人は、世界に10人もいないと言われる

I G O の定める「グルメ八法」により、毒化したフグ鯨の流通は禁止されているが、毒化しても味は変わらないという理由から、闇ルートで毒化フグ鯨は大量に出回る

「死んでも食べてみたい食材」として、多い年で10万人が中毒で亡くなるという

特殊調理食材に指定されている

産卵時にはフグと同じくらいの大ささしかないので「ミジンコ鯨」とも呼ばれる

普段は深海ふかくに生息している為、捕獲のチャンスは10年に一度の産卵期のみ

しかも近年の産卵場は「洞窟の砂浜」に限定されている

浅瀬では身を寄せ合って泳ぎ、まるで巨大な1頭のクジラのように見せかけて外敵から身を守る

非常に繊細で、ほんの僅かな刺激を受けただけで“ぶわお”と毒化してしまう。ノッキングの壺は、エラから頭部の中心へ、斜め45度の角度

個体により毒袋の位置が異なり、毒袋の位置により捌く手順が変わってくる

その何百通りもある捌き方を正確に記憶した上で、ミリ単位の正確な包丁捌きができなければ、フグ鯨は簡単に毒化してしまう。毒袋の除去に成功したフグ鯨は、まばゆく輝き出す

毒化していないフグ鯨の末端相場は約1億円

毒袋を完全に取り除くと5億円

毒化した場合は0円だが、闇ルートで約800万円の値がつく。

フグ鯨の刺身は、ピンク色をしており、霜降り牛肉のように脂が乗っている

噛み締めると口いっぱい脂の旨みが広がり、噛めば噛むほど香りと味が高まり、まるで深海のように底の見えない、終わらない至福をもたらす

生息地：普段は深海だが、10年に1度の産卵期には浅瀬に浮上する

体長：50cm～60cm

体高：-

体重：5kg～7kg

価格：肉は100g/92万円

「深海の珍味」と呼ばれる幻の鯨

幼魚の頃は浅瀬で生息するが、成魚になると深海に移動する

水圧差で約6mの体長が50cm～60cmにまで圧縮されるため、その身は旨味が凝縮され最高の味を生み出すといわれる

ただし、体内の老廃物も同時に凝縮されるため、その老廃物が毒袋となり致死性が高い猛毒になる

毒袋は一度破れると一瞬にしてフグ鯨の全身に毒が回ってしまうしかも個体により毒袋の位置が全く違うため完璧に破かず除去できる料理人は世界に10人もいないといわれる

I G Oが定めるグルメ八法により毒化したフグ鯨の流通は禁止されているが、毒化しても味は変わらないという理由から闇ルートで毒化フグ鯨が大量に出回り、その毒化したフグ鯨によって多い年で約10万人が中毒で亡くなるという

まさにフグ鯨が「死んでも食べてみたい食材」と称される所以である。ちなみに毒袋を取り除いた個体は末端相場で5億。毒化しても闇ルートで800万円程で取引されている

捕獲レベル：29  
分類：魚乳類

「ああ、捌ける奴は世界に10人といない、まあこれから会いに行く奴は料理人じゃね〜けどな」  
「え？」

トリコは再び酒に手を付ける

「おいこらあ〜！」  
「あ？」

いきなり少しは背が高くいかにも田舎から出てきたような男が怒鳴り込んできた

「酒が少な〜っと思ったたらこんな所に沢山あるじゃね〜か！舐めやがって！俺は美食屋ゾンゲ様だぞ！ゴラァ〜！」

「あ〜ん？ふう〜龍聞いたことあるか？」

情報通である俺に聞いてきた

「いや微塵も聞いたことない」  
「やいやいやいやい！」

「見て驚けよ！ゾンゲ様の人生のフルコースを！」

「オードブルは金色イクラ！（捕獲レベル2） スープはヘビガエルの肝スープ！・・・」

「普段僕が料理で使う食材ばかりだ・・・」

「捕獲レベルも低い、たいした事はない」

「そつえば龍さんはフルコース決まってるですか？」

「2つだけね」

「なんですか!？」

「オードブル ヘルフォートレス 魚料理 鰐鮫<sup>わにざめ</sup>だけだよ」

「わ、鰐鮫<sup>わにざめ</sup>って捕獲レベル27ですよ!？でもヘルフォートレスって何ですか?聞いた事ありませんが・・・」

「まあそれはそうだろうヘルフォートレスはワールドキッチンにも入ってこない食材だからね」

鰐鮫<sup>わにざめ</sup>

180 度開口<sup>どかいこう</sup>できる大きな口<sup>くち</sup>を持つ 魚獣類<sup>ぎよじゅうるい</sup>  
鰐並<sup>わになみ</sup>の 強力<sup>きょうりきよく</sup>な 顎力<sup>がくりきよく</sup>で 一度<sup>いちど</sup> 喰<sup>く</sup>らいついた 獲物<sup>えもの</sup>は 決<sup>けつ</sup>して 放<sup>はな</sup>さない

その捕獲<sup>ほかく</sup>レベルは 弱肉強食<sup>じやくにくきょうしよく</sup>の 食物連鎖<sup>じよくもつれんさ</sup>で知<sup>し</sup> られる、いにしえの 沼地<sup>ぬまち</sup>でも 一<sup>いち</sup>、二<sup>に</sup>を 争<sup>あらそ</sup>うほど 高さ<sup>たか</sup>を 誇<sup>ほこ</sup>り

まさに沼の主に相応<sup>ふさわ</sup>しい実力者<sup>じつりきよくしや</sup>である

また、その 肉<sup>にく</sup>は 高級<sup>こうきゅう</sup>で 刺身<sup>さしみ</sup>でもクセがなく 食<sup>た</sup>べられるとか

捕獲<sup>ほかく</sup>レベル: 27

分類<sup>ぶんるい</sup>: 魚獣類<sup>ぎよじゅうるい</sup>

生息地<sup>せいそくち</sup>: 沼地<sup>ぬまち</sup>から 海<sup>うみ</sup>まで 広く(ひろ) 生息<sup>せいそく</sup>する

体長<sup>たいちよう</sup>: 43 m

体重<sup>たいじゅう</sup>: 27 t

価格<sup>かかく</sup>: 100 g / 4 万7000 円<sup>まん 7000 えん</sup>

ヘルフォートレス (オリジナル)

グルメ界に根を下ろす最強の米

ET米より味が深く濃厚な味がする

何も付けなくても米からあふれ出す甘みとほんの少しの辛味が絶妙にマッチして口に入れた瞬間



意識が飛んでしまうほどの旨みを持つ

その米のとき汁は美容と滋養強壯の栄養を多く含みゆっくり温める事によって圧倒的な輝きを放ち

口にしたら全身の疲れ、肌荒れ、枝毛、疲労回復、肩こり、血行を良くするなどの様々な効果がある

だが収穫するのは難しい

稲はBBコーンより硬く糠も取るには淹並みの水流の強さがないと取れない

グルメ界の猛獣たちもめつたに食べる事ができない

名前の由来は生息する場所が断崖絶壁の崖の上に根を下ろしているその崖の下は猛獣たちが食物連鎖を繰り広げており骨や血で溢れている

その光景からその崖が地獄に聳え立つ巨大な要塞に見えたためこの名がついた

捕獲レベル：測定不能

気がつくゾンビ・・・だっただけ？

酒を受け取り去った

その後は次郎が来て酒を渡して俺はトリコ達と雑談をして到着するのを待った  
そして

—————グルメフォーチュン—————

「はあここにフグ鯨を捌ける人がいるんですね〜ってか人がぜんぜんいない」

街には人っ子一人いない  
いわばがら〜ん状態

「猛獣の出る時間だね」

「ああ、ここの居る占い師が猛獣の出る時間帯を占うんだ、その時間住民は家に隠れてるって話だ」

「って言ってるそばから来たぞ」

建物の中から出てきたのはクエンドン

クエンドン

捕獲レベル：10

翼竜獣類

「煮て焼いても食べねークエンドンか」

「俺がやってこようか？」

「いやその必要はないだろう」

トリコが道の向こうを指差す

その先には一人の人が歩いてきた

クエンドンも気付いたようでそちらを向く

その人がクエンドンの前をと通り過ぎようとした時  
クエンドンは噛み付こうとした

「あ、危ない！！」

声小松君はを上げるがクエンドンはあと少しの所で止まり  
その人が前を通り過ぎるとその場を去っていった  
そしてその人がこちらに来た

「僕の占い通りだ、嫌な客と嬉しい客が来たものだ」

「へっ！お出迎えとは嬉しいね流石四天王一の優男だなココ！！」

「ふっ！四天王一の食いしん坊トリコ！久しぶりだね！そして君にあえて嬉しいよ僕の大親友、龍！！」

「久しぶりだなココ」

「トリコさん、龍さんまさか会いに来た人って四天王美食屋ココ！！??？」

## 四天王ココ登場！（後書き）

オリジナルの食材を出しました

鰐鮫に関してはコミックを見たため読み方を入れました

## 不吉な占い

俺達は今ココの家に向かって歩いている

「もう直ぐ僕の家だから」

「はあはあ・・・」

小松君は息が上がっている

「でも四天王のココさんがなぜ占いの街のグルメフォーチュンに？」

「今僕の本業は占い師だからね」

「四天王が占い？」

まあ意外だろうな

「そういえばゼブラの奴はどうした？龍知ってるか？」

「いや、最近は忙しくてねゼブラの事は入ってこないんだ、ココ知ってるか？」

「捕まったよ今はグルメ刑務所だ」

「はははついに捕まったかあの問題児」

「まったく」

トリコはあさつての方向を向いた

「思い出すぜえ4人でよお死にぐもぬるいで庭で修行した頃お」

「昔の話だよ」

「はあはあ・・・」

小松君が俺達に追いついた頃に俺達の立っている場所が陰になった

上を見ると巨大な鳥が俺達の上を巡回していた

「カラスのオバケェー!?!」

「迎えに来てくれたのかい? キッス!?!」

「おお! 空の番長エンペラークロウ! 絶滅種じゃねーか!」

「ええー!?!」

エンペラークロウ      えんぺらーくろう

「空の番長」と呼ばれる巨大なカラス

生息地：絶滅種とされているが「グルメ界」のどこかに今でも生息

体長：8.5メートル（キッス）

体高：3メートル（キッス）

体重：570kg キッス

価格：100g/90万円

「空の番長」と称される絶滅種

カラスならではの高い知能を持つため、飼い馴らせば人間の命令を理解することができる

エンペラークロウの唯一の生き残りといわれるキッスは、ココの大事な家族の一員で、雛の頃からココに育てられたらしい

絶滅種とされているが、地上のどこかに存在する「グルメ界」には今なおエンペラークロウが生存しているとの噂だが真偽のひとは定かではない

キッスはココの言葉を理解し、意見疎通を図ることができる

「僕の家族キッスさ、4人運べるかい?」

「グワァー」

俺達はキッスの背中に乗りココの家に向かった

ココの家

「僕も賛成だな虹の実をデザートにしたのはまあ僕の占いどつりになつたわけだけど」

ココが話している間もトリコはココの出してくれた料理を食い続ける

「つゝかもつと龍みたいに上品に」

俺は静かにゆつくりと食べている

「で？お前はどうかんだよ？人生のフルコースは完成したのかあ？」

「ああ僕のメニューはリードラゴンの涙のスープやオブレオカジキのステーキなど

栄養バランスのいいメニューを揃えてある、決まってないのはオードブル、メイン、ドリンクの3つさ」

「どれも捕獲レベルも高く値もつけられない物ばかり」

「そんな話をしに来たんじゃないだろう用件は仕事依頼フグ鯨の捕獲だね」

「さすが話が早え」

「難しい仕事だね僕でも毒化せずに捕獲したとしてそのまま捌くとして僕で1割程度」

「そんだけありや十分俺じゃ一匹も捌けないだろうからな」

「威張る事か？それ？」

「さらに残念なデータがある」

「洞窟は全長数十キロ深さは800メートルもあり猛獣もいるそして一番めんどいのデビル大蛇だ」

「龍知ってたのかい？」

「まあねだけど俺も相棒に比べたらデビル大蛇なんか可愛いもんだ」  
「ん？龍の相棒って確か・・・ジャコウって名前だっけ？」

「ああそうだ」

「そういえばどんな奴なんだい？」

「気になる？」

「「「気になる（なります）」」」

「じゃあ教えてあげるよ俺の相棒は・・・」

「「「相棒は？」」」

「デモンデビル大蛇」

「「「・・・・・・・・」」」

あり？なんか拙い事言った？

「「「なに〜〜！！！！？？？」」」

「うわぁ！なんだよ！大声出して！」

「出すに決まってるんだろ！」

「デモンデビル大蛇と言えば！デビル大蛇の亜種でデビル大蛇に  
より強いって言う奴で伝説の魔獣と謳われるほどの奴じゃないか！

「！」

「ココ！エンペラークロウを相棒にしてるお前に言われたくね〜よ  
！」

そんなやり取りがあり俺達は洞窟に向かった



## ノッキングマスターとの再会（前書き）

久しぶりの投稿です

## ノッキングマスターとの再会

俺達はフグ鯨の産卵場所である洞窟に向かっている

そしてなぜかグルメTVのティナいた

ココを撮ろうとしたらココは拒否した

やっぱりな・・・毒の事を俺に相談してきたりしたからな

「なんか・・・不穏な空気が・・・」

小松君が洞窟の周りに居る武器などを持った人たちを見て言葉を漏らす

「美食屋が捕獲したフグ鯨を横取りしようという連中だろう」

「洞窟から戻ってこれても危険なんですね・・・」

「大丈夫だよ俺が居るし」

「ほぼ全員に死相が見える・・・」

そんなこんなで洞窟の入り口に到着

深く真つ暗だ・・・

まあ俺の目もココと同じだからはっきり見えるけどね

「ひいゝ！！！！やっぱり恐いゝ！！！！」

「（この洞窟に居る何かに命を取られるというのか？）」

「さあゝて出発するとすつか」

「おう」

「はい！」

「幻の魚フグ鯨・・・」

「あん？」

「え？」

いきなりティナが声を上げる

「どんな食材が知りたい・・・あたしが知りたいんだから世界のみんなが知りたいはずよ」

いや・・・なんでそうなる？可笑しくね？

「この私がフグ鯨の美味しいニュースを教えてあげるの！」

「そう言われてもだね・・・」

「ついてなら勝手にすればいい、思い立ったが吉日・・・その日以降は全て凶日だぜ」

結局ティナも付いてきて俺達は洞窟の中に進んでいった

「あ！ポキポキキノコだあ！！」

「マジでか！」

小松君とトリコはポキポキキノコが生えているほうに駆けていった  
トリコはキノコを食べ始める

「おゝ！！このポキポキの菌ごたえ・・・くゝ！！最高だぜえゝゝ！！」

「ココさゝん！龍さゝん！ここいっぱい生えてますよゝ！！」

「だから離れるなつて・・・」

「ははは・・・小松君はコックの血が騒ぐのか食材を見るとついそつちに意識が行っちゃうのさ」

この後確か・・・死霊のはらわた・・・だっけ？が巨大ヤスデから逃げていった

ティナは死霊のはらわたがフグ鯨を捕獲したという嘘に騙されて見せてもらおうと一緒に洞窟から出ていた

俺達はスルーして進む事にした

ココを先頭に進んでいく

所々エメラルドのような水晶が顔を覗かせている

「随分狭くなってきましたね・・・」

「ああでも間違いないね・・・」

トリコはすうすうと鼻から息を吸い込む

「僅かだが潮の香りがする」

「相変わらず凄い鼻ですね、それにココさん明かりもなしによく進めますね」

「ココにはな人間には見えない赤外線から弱い紫外線全部見えちゃうらしい」

「ええ！？」

「目には光を受け取る細胞、視細胞があつてね僕の視細胞は通常の数百倍この暗闇でも昼間のように明るく見えるだ」

「それだけじゃねえココの目は普通の人間には見えない電磁波まで捉える」

「ああまあね僕の占いはその人から出る電磁波の色や形、量を見てその人の将来を占うんだ」

「じゃあ僕の未来も見てください！」

小松は後ろ向きで歩き出す

「一流の料理人になれますよね！？どうですかココさん！？」

「（（光が更に微弱に？））待て！止まれ！」

その時には遅く小松君は崖になっている部分から落ちそうになったがトリコが間一髪手を掴み落ちずに済んだ

「なにしてんだよ？」

「すみません・・・」

カサカサ・・・

「何か音がするんですけど・・・」

小松君が下を見ると俺も大嫌いなサソリゴキブリがうじゃうじゃ出てきた

サソリゴキブリ      さそりごきぶり

猛毒を持つ凶暴な巨大ゴキブリ

背中に特徴的な模様がある

巣に落ちてきた獲物を集団で襲い、瞬く間に食いつくし、骨だけにしてしまう

生息地：暗くてジメジメした洞窟

体長：2.5メートル～3メートル

体高：1.5メートル

体重：250kg～280kg

価格：食用としての価値はゼロ。ただし一部のゲテモノ好きの間では高額で取引される

猛毒を持つ巨大なゴキブリ

見た目のグロテスクさに加え、繁殖能力が高く、群れで行動するため、集団だとさらにキモさが倍増

I G Oが毎年公表する「捕獲したくない生物ランキング」では「危険だからイヤ!」というよりは「キモいからイヤ!」

という理由で常に上位にランクインするぐらいの嫌われっぷりである

捕獲レベル：7

分類：昆虫獣類

この後はココが先に降り毒を使いゴキブリを追い返しココが自分の事を詳しく話し穴を降りた

そして何かが接近するのを感じた

そしたら向こうからアゲハコウモリの群れが来た

「アゲハコウモリの群れだ!」

アゲハコウモリ

アゲハ蝶のような模様の羽をもつコウモリ

暗闇の中を無音で飛ぶ為、洞窟内で襲われると厄介な存在  
生食可能?

生息地：暗くて静かな場所

体長：70cm

体高：-

体重：1kg

価格：1匹/1万5千円

アゲハ蝶のような模様の羽を持つコウモリ

集団で群れをなして行動し、臆病な性格のため、食べ物を捕獲する以外には滅多に外部の生物には危害を加えない

食用としては身の部分よりも、羽に付着しているリンブンが香辛料

として使用され

そのスパイシーな味のリンプンは「アゲハコウモリスパイス」として、数多くの料理人たちの必需品として活躍している

捕獲レベル：2

分類：哺乳獣類

「僕がやる小松君下がって」

「あつは、はい」

ココは右手を出し毒を染み出させる  
それをアゲハコウモリに向かって飛ばす

「ポイズンドレッシング！」

ポイズンドレッシング

指先から滴らせた毒液を、手首のスナップで飛ばし、広範囲の相手に攻撃を浴びせる技  
毒を浴びアゲハコウモリは墜ちていく

「毒は抑えた直ぐに飛べるようになる」

「臆病で滅多に襲う事のない奴らがどうして？」

「ああ襲うというより何かから逃げていく感じ・・・ハッ小松君は！？」

周りを確認するが小松君は居ない

「小松！？小松！！」

「小松君！！」

うねうね・・・

「！！！！」

この感覚・・・

「ココ！トリコ！何か来るぞ！！」

「え！？」

「ギオゝアゝアゝオゝギャアゝアゝ！！！！」

俺達の目の前に現れたのはデビル大蛇だった

「ち！面倒なのに会ったぜ！！」

「龍！トリコ！奴の相手は僕がする、その間に小松君を！」

「ココ！コイツ相手にさすが一人じゃ無理だ俺も残るぜ！龍！小松を頼むぜ！」

「任せろ！！」

俺はデビル大蛇をココとトリコに任せ小松君を探しに行った  
デビル大蛇は俺を追おうとするが

「おっと！僕の大親友に手は出させないよ！」

「デメエの相手は俺達だ！」

ココとトリコが抑えてくれた  
よっし探すか！！

でも急がないと！ここは迷路だ早くしないと小松の命が危ない！  
くっそ！どこだ！？

探していると・・・



ドカ〜ン！！！！！！！！  
とんでもない爆音が響く！

「おわあ！耳が！耳があゝ！！！！ってやってる場合じゃないこつちか！！！！」

俺は走り出した

着いた所ではデーモンデビル大蛇が居たくつそ！俺が蘇生するしかないか！

「ほう！今の爆音に動じないとは流石じゃなあ」

つて！あの白リーゼント！まさか！

その老人は肩にノッキングをし巨大化しあつという間にデーモンデビル大蛇をノッキングし

小松君を蘇生した

「もう大丈夫」

「つて！先生！なにやってんすか！？」

俺は次郎に話しかけた

「なんじゃ？おう！龍じゃないか！元気だったか？」

「まあご覧の通りですってか何やってるんですか？」

「十年に一度のフグ鯨じゃぞ？」

「ああ鰭酒目当てですか」

そんなやり取りをしていると小松君が起きた

「おう起きたか二度の人生噛み締めて生きるといい」

先生を見て小松君は驚く

「ああゝ！！！！でかい爺の化け物ゝ！！」

と言って逃げ出す

「化け物だと！命の恩人だぞう！？」

「え？命の？はっそう言えば僕はあの時・・・」

「じゃあ気をつけてなういっく」

先生は去っていく

「あ、あのう！」

「あつそうだ洞窟の砂浜に得体の知れないものが近づいてきとるから  
フグ鯨を捕まえたら早く帰ったほうがええぞおッじゃな龍」

先生は去っていった

その後小松君は俺に泣き付いてきた

「っていうか龍さんあの人、龍さんの知り合いなんですか？」

「ああ俺のノッキングの先生だ」

## フグ鯨 実食の時！

先生と別れた後にトリコ達と合流し洞窟を進んだ

「小松、お前は命を助けられた恩を忘れちゃいけない。何時か爺さんを最高の料理で迎えてやんな」

「はい！じゃあトリコさんその時は食材調達お願いしますね！？」  
「おい見る！」

トリコは明かりが見えたら走り出した

俺達も追いかけていくとそこは洞窟の中とは思えないほどの明るさだった

所々から水晶が飛び出し美しい光景が広がっていた

「さあ捕獲するぜ！深海の珍味！」

トリコは上着を脱ぎ飛び込んだ

「ああ！待ってくれよ！」

俺もあわててノッキングガンを持ち飛び込んだ

しかも驚いた

とんでもなく水が澄んでいる

これが本当に海か？

真水並みに澄んでいる

あ！トリコが指でノッキングした！

俺も行くぜ！

「消命・・・」

気配を消してフグ鯨に近づきエラから頭部の中心へ、斜め45度の角度で

「ノッキング・・・」

ノッキングガンの先端がフグ鯨の中に入りフグ鯨を麻痺させる  
よし！師匠のお土産用と優奈のにもね

「あれ？龍さんは？」

「まだ上がってないのかい？」

「ぷはぁ！」

「お！上がってきたな！そっちはどうだった？」

「なんとか7匹だ」

「7匹か！俺達の勝ちだな」

「いつの間に勝負になってたんだ？」

俺は水から上がり4匹を残し3匹を捌く

小松君も捌き始め失敗続きだったが最後の1匹で成功

「おい！龍！見ろよ！小松の奴やったぜ！」

トリコがこちらを見る

俺はなんとか3匹捌くことができた

「ぬお！3匹捌いたのかよ！？」

「ああ1人1匹ずつな」

「本当ですかぁ！！？」

「ああ今回小松君ががんばったからね」

「有難う御座います！」

「それにしても・・・3匹捌いちゃうなんて・・・」  
「まあ・・・疲れがなかったからかな？」

そしてフグ鯨を刺身にした

「この全て食材に感謝をこめて！」  
「」「」いただきます！」「」  
「では早速刺身を！」

トリコはいつきに箸で刺身を取る

「おゝ！！！」  
「ああゝ！ちよつと取りすぎですよ！」  
「まあ僕達も食べよう」

俺達もフグ鯨を口に入れる

「甘い！なんて脂の旨みだ！最高級のミミック鯨の霜降り肉とマグロの大トロが合わさったみてゝだ！  
うめゝゝ！噛んでも？んでも味が出続ける！噛み過ぎて顎がいてゝでもやめらんねゝ」

ゴクッ

飲み込んだ瞬間身体の疲れが吹っ飛んだ

「おお！疲れが一気に吹っ飛んだ！滋養強壮の効果があるとは聞くがこれほどとは！」

「トリコさゝん！鱈酒できましたゝ！」  
「ああ！」

ズズッ

「うめえゝなんて美味しい鰭酒だ・・・香ばしさが全身を突き抜ける・・・」

辛口の熱燗で旨みが増して全身の細胞に染み渡る・・・」

「ココどうだった？」

「久しく忘れていたよこの感動・・・美食屋か・・・また初めてみるかな」

「・・・ご馳走様でした」・・・」

「さあてかえろうか？」

バチャン

水音立てて現れたのは黒い毛をしアリクイに似た頭部をした人型の物体

スタージユンのG Tロボだ

ココは致死性の超猛毒をだし

トリコモ戦闘態勢

「・・・目的は達つたろさつさと帰れ・・・」

俺は低い声で言う

G Tロボは頭をかきフグ鯨の網を持って帰っていった

「龍・・・あれはいつたい・・・」

「・・・おそらくG Tロボだろうそれより早くここを出よう」

「ああ」

俺たちは荷物をまとめ洞窟を出た

俺は師匠のもとに出向き今回の事を話し第1ビオトープに向かった

## トリコの怒り

俺は今トリコと小松君と一緒にヘリに乗り第1ビオトープに向かっている

トリコと俺はハンバーガーを作っている

「デビル大蛇のハンバーグにネオトマト、ミネラルチーズを挟んだ名づけてトリコバーガー！」

「そのトリコバーガーの照り焼き版名づけて照り焼きトリコバーガー！」

「でかすぎですよ！っていうかそのまんま！」

「この世の全ての食材に感謝をこめていただきまあ〜すう！」

ゴキイ

「顎を外して食べた！！」

「うん癖はあるが弾力はあるこの肉の歯ごたえ清々しいネオトマトの風味

まろやかなミネラルチーズが心地いい味の三重奏を奏でてやがる」

「甘みを帯びしつとりとまろやかになったこの肉この照り焼きソースのかかったトマトやチーズも更に味が深く濃厚になっている」

ゴックン

「うめ〜！！」

「そういえばフグ鯨いかがでしたか？」

ヨハネスが聞く

「インパクトはあったが見送りだな海にはまだ食った事ねえ〜食材がおいしい

フルコースの魚料理はそう簡単に決まりそうにね〜よ」

「なるほどしかし今回IGO捕獲を依頼した生物は」

「リーガルマンモス その体内のどこかには上質な肩肉 ヒレ肉  
モツ サーロイン

それらの全ての美味さを持つ肉 ジュエルミートがあるという」

リーガルマンモス

第1ビオトープ、リーガル島のリーガル高原に棲息する、6本の足、  
2本の鼻と牙、一対の羽をもつ、虎毛模様の超巨大マンモス

捕獲アベレージ27という猛獣達が住まうリーガル島の生態系の頂  
点に君臨し、高原を悠然と闊歩する

その驚異的な肺活量を以って、周囲にいる猛獣達を鼻から吸い込み、  
そのまま咀嚼して

骨のみを再び鼻から吐き出す食事風景は圧倒的。

リーガルマンモスにのみ存在する特殊な部位“ジュエルミート 宝石の肉”により、

「古代の食宝」と呼ばれている

正確な技術をもってすれば体内の宝石の肉を取り出されてもマンモ  
スが死ぬことはなく

マンモスが生きている限り、宝石の肉は再生するという

成長して巨大になるにつれ捕獲レベルが高くなる。

鳴き声は「バオオオオオ」

>引用<

「古代の食宝」と呼ばれる巨大なマンモス

成長が早く、産まれてから数週間で体長50メートルにもなる

（産まれた時は約10メートル）

繁殖力は強くないが、その分長寿で、500年以上生き続け、その  
間も成長は止まらない



## 「鼻」

左の鼻で吸い、右の鼻で吐き出す。主に栄養分のみを吸収するため骨などを溶かす程の強い消化能力はない

鼻は全て硬い筋肉で、食べると牛やブタの舌のような食感がある

## 「肉」

ほとんどの旨みを“ジュエルミート 宝石の肉”に取られてはいるが、それでも十分に旨い

## 「羽」

大昔は空を飛んだというウワサもあるが、今ではほぼ必要のないものである。味は鳥皮に近く、けっこう美味

## 「胃」

全部で12個ある胃でほとんどの物を消化体内は広いため、空気も通っている。生物も棲んでいて、独自の生態系も確立しているとか

## 宝石の肉ジュエルミート

個体により場所が違うため見つけ出すのは至難。小売で100g500万円。

トリコ達が体内に入ったマンモスは捕獲レベル：48

年齢は約400歳

リーガル（地名）+マンモス

捕獲レベル：NO

分類：哺乳獣類

俺達に乗ったヘリは第1ビオトープに到着し地下に向かうエレベーターに乗った

「所長さんってどんな人なんですか？」

「唯の酒飲み親父だ、まあ会長、副会長についてナンバー3と言われてるみたいだけだな」

「ナ、ナンバー3って緊張しますね・・・」

「緊張感を持つと何が襲ってくるか解らないからな」

そしてエレベーターの扉が開き様々な猛獣が見えてきた

「これって・・・？」

「絶滅種のクローンや動物同士の混合種チエインアニマルだ、束縛された動物

グルメ研究と言う大儀をかざしているが倫理的な観点からトップシークレットの場所」

「・・・」

「龍・・・大丈夫か？」

「ああ・・・やっぱり胸糞悪いぜ・・・命を弄ぶみたいで・・・」

俺は無意識に殺気を出していた

それに寢床から出ていたマッスルクラブも戻っていた

「おーう！久しいなトリコ！龍！」

奥から現れたのは酒を片手に持った男だ

「もう飲んでるか？マンサム所長？」

「今ハンサムって言った？」

「言ってねーよ！」

「この人が所長さんですか！？ッてお酒クサ！」

俺達はグルメコロシウムに入り席に座った

猛獣達が次々に入ってきてついにバトルウルフが来た

・・・久しぶりに見たな・・・バトルウルフ・・・

あいつ元気かな？

そんな考えに浸っているとトリコが乱入し5連釘パンチで

特殊超硬化アクリル板を破壊し新たなバトルウルフ誕生の記念の花  
火とした

そしてバトルウルフがデーモンデビル大蛇を倒した

だがバトルウルフをGTロボがビームで打ち抜いた

俺はすぐさまGTロボに近づいた

「おい・・・」

「アン？オマエハ！ジャリュウハオウ！リュウト！」

蛇龍霸王というのは俺の二つ名だ

蛇はジャコウから

龍は俺の名前からだ

霸王は何故か付いた

「・・・殺す必要があつたのか・・・ベイ・・・」

「アン？マズソウダカラコロシタダケダ」

「・・・」

右手にリボンピング・バンカーを展開する

「うるらあ！！！」

GTロボの腹にぶち込む

「ゴボォ！」

G Tロボをコロシムの方に吹き飛ばす

「龍！！こいつは俺が駆除する！！！！！」

トリコの周りには殺気にも似たオーラが出ている

「まかせるぜ」

この後いきなり5連釘パンチを放ちG Tロボを粉々に粉砕した  
俺との修行もあってトリコは原作よりパワーアップしているようだ  
な

## サニー登場

俺達はコロシアムの一件のあとマンサム所長のフルコースをご馳走になったはいいが

リーガルマンモスの事をすっかり忘れていたがサニーが捕獲完了したという事だ

今は外で待っている  
がぶりゅ

トリコは酒乱牛にかぶり付いた

「うめえ〜！酒乱牛！肉汁とテキーラの味が口いっぱい広がって味に酔うとはまさにこのことだ」

「わしにも食わせろお！」

「渡すか酔っ払いめ！」

「外まで食事持つてこなくて・・・あつそつだトリコさん龍さんはどうしたんですか？」

「龍はなんかを呼んでくるって言ってたぞ」

「何かを？」

「あ！お兄ちゃん着たし！」

「「「え！？」「」」」

リンが向く方向を向くと巨大な物が見えた

6本の足、2本の鼻と牙、一对の羽、虎毛模様  
それを片手で支えている一人の男

1歩1歩踏み出すたびに地面は凹んでいる

リーガルマンモスの体重が伺える

「で、でか！あれがリーガルマンモス！？」

「古代から食の宝 食宝と言われてきただけの事はあるな、圧倒的

なサイズだな」

「にしても・・・あのサイズは・・・」

すると近くの岩場から何か出てきた

「ギャングフットの群れだし！」  
ギャングフット

凶暴で食欲旺盛なことで知られる猛獣で群れを作って行動する  
時には、他者が捕えた獲物を横取りしようとすることも  
頭部から尻尾にかけてタテガミが生え、あごひげを生やし、2足歩  
行する

鳴き声は「ハルルル」「ブルアアア」

生息地：リーガル島第1ビオトープ

体長：4メートル

体高：3.5メートル

体重：1.5トン

価格：食用としての価値は0

「リーガル島のギャング集団」の異名を持つ凶暴で食欲旺盛な爬虫  
獣類

群れで行動し、他の動物が狩った獲物を横取りして食べる。一匹一  
匹の捕獲レベルもさることながら

群れでの特性を活かした狡猾な集団攻撃はタチが悪く、手ごわい猛  
獣である

捕獲レベル：15

分類：爬虫獣類

ギャングフットはリーガルマンモスを奪おうと襲い掛かるが

「ウゴオ！？」

「バア！？」

ドサササ・・・

ギャングフットはノッキングされたように倒れ眠りはじめた

「ノッキング！？」

サニーは近くまで来たらリーガルマンモスを此方にパスしてきた

「「「ええ！？うわぁー！！！！」」」

トリコ達は避難　マンサムはリーガルマンモスを受け止める

「あつごめちよつと重かった？でもナイスキャッチ所長！でも美しくさが足りないけど」

「「「え？」」」

「受け止める所作に胸がドキゅんってしないし全く感動が起きないって言うか

そもそも顔も不細工色気もないしもう消えろって感じかなあ、全く龍だったらめっちゃ美しくできるのに・・・」

「なananだこの人ー！！！？？」

「コラァー！サニーー！！大切な食宝をぶん投げるなあー！！」

「マジで美しくねえ」

サニーは超能力を使っているかのようにふわりと浮き上がりトリコ達の近くに来た

「やあ久しぶりだなトリコ以前より細胞が活性化している肌の弾力

性も高いいいもの食べてる証拠だな」

「いきなり肌触りまくるんじゃないやあね〜よキモチワリイ」

「リン・・・お前！何だその土管みたいな足は！久しぶりに会ったら皮下脂肪もハンパねえ！

そんな甘いもんばっか食べてるからだ！」

サニーとリンが喧嘩を始めようとしたタイミングで

「ギオゝアゝアゝオゝギャアゝアゝ！！！！！！！！」

「〜〜〜〜！！！！！！！！」

トリコ達が雄たけびが聞こえた方向を見たら

通常よりでかいデーモンデビル大蛇がこちらに向かっていた

「でえ〜！！！！！！」

「おいおいリーガル島にはデビル大蛇もデーモンデビル大蛇もいないはずだろう？」

「お〜いトリコわりい遅くなった」

「龍さん！？」

「ん？どうした小松君？」

「嫌だって何でデーモンデビル大蛇の頭の上に乗ってるんですか！？」

俺はジャコウの頭の上に乗っている

「あれ？前言わなかったっけ？こいつは俺の相棒ジャコウだ」

「あ！ココさんの時にデーモンデビル大蛇が相棒だと言ってましたね」

「ギョル」

「久しぶりだな龍」

「おうサニー久しぶり」



「にして・・・ジャコウ・・・おま相変わらず肌がつつるだな  
普通のデーモンデビル大蛇はキモイがジャコウお前は美しい」  
「ギョル」

ジャコウはサニーに何かを渡す

「お！これキューティクルベリーじゃん！サンキュ！ジャコウ」  
「あのおートリコさん龍さんって四天王の皆さんと親しいですか？」  
「ああ龍は四天王になる前に一緒に修行もしたしな、得にサニーと  
ココは龍を慕ってる」

## 炸裂！フライ返し！

俺達はリーガルマンモスの生息地である

リーガル高原に向かっている

ジャコウはテリーと早速仲良くなったようです

なんか通じる部分があるのかなあ？

俺達は黒草の草原ブラックカーペットに到着した

「おお！黒草の草原ブラックカーペットじゃねーか！」

「サラダにしたら最高だろーなあー」

## 黒草 くろくさ

様々な草食獣が好んで食べる草で、その草原は「ブラックカーペット」と呼ばれる

シャクシャクとした歯ごたえで、サラダとしても人気が高い食材

そのまま食べても美味しいがココアマヨネーズをつけて食べると絶品

生息地：温暖で栄養豊富な大地

体長：約30cm

体高：-

体重：-

価格：50本1束 / 1200円

イラクサ科の多年草

その色味からは苦そうないメージだが、味そのものは、フレッシュな口あたり

食感はニラや青ネギに似たシャキシャキとした歯ごたえ

また、群生する黒草はブラックカーペットと呼ばれ、周辺に生息す

る草食動物たちの貴重な栄養源となる

捕獲レベル：1以下

分類：植物

ジャコウは早速好物である黒草を食べ始める

トリコモリンが見つけたココマヨの樹でココアマヨネーズを  
黒草にかけ食べる

ココアマヨネーズ

ココマヨの樹からとれるマヨネーズ暗くて静かな場所  
黒草につけて食べると絶品

生息地：温暖で栄養豊富な大地

体長：-

体高：-

体重：-

価格：スーパーなどで1本500g/2500円

ココマヨの樹はウルシ科の落葉高木

その熟した実には、脂分が豊富に蓄えられており

ココアの苦みとマヨネーズの酸味が混ざったような味のココアマヨ  
ネーズが入っている

生野菜などのサッパリした食材のドレッシングとしてはもとより、  
その癖になる味わいから

「ココマヨラー」まるココマヨ好きも多いとか

捕獲レベル：1以下

分類：天然食品

するとテリーが吠え始めた

「テリー？」

「！トリコ」

サニーが向いている方向を見ると

全身を硬い岩で覆われたかのような、巨大なヒト型の猛獣が近寄ってきた

「なんなんですか！あれえゝ！？」

「ロツクドラム」

ロツクドラム

全身を硬い岩で覆われたかのような、巨大なヒト型の猛獣  
本来の生息地は海岸近くだが、その旺盛な食欲を満たす為、より大量のエサを求めて内陸部にも進出した  
強固な甲殻からに覆われており、その肉は珍味とされているが……  
サニーによると皮膚には独特の弾力があるものの、ほとんどが脂肪  
だという

その甲殻は、超硬タンパク質の表皮に美炭酸カルシウムが付着して  
できており、完美大理石の原料となる

鳴き声は「ヴロロ」「ゴアア」「ヴォオオ」「ゴロロ」

生息地：岩場の多い海岸から山まで幅広く生息

体長：-

体高：35メートル

体重：50トン

価格：肉は1kg/2万円　殻の岩は100kg/600万円前後  
で取引される

もともと海岸近くに生息していたが、あまりの大食漢故に大量の食料を求めて陸地の奥に進出した好戦的な巨大甲殻獣類

食用としても用いられるが、全身を覆う硬い甲殻は超硬タンパク質の表皮に美炭酸カルシウムが付着した素材で

加工すると世界一硬くて美しい大理石と言われる「完美大理石」の原料となる

そのため肉よりも甲殻の方が何倍も高値で取引されている

その高額の甲殻を求めてロックドラムの捕獲に挑む美食屋たちは後を絶たないが

そのほとんどがロックドラムのパワーの前に返り討ちにあっているらしい。

捕獲レベル：27

分類：巨大甲殻獣類

「小松お前は下がってる龍、小松を頼む、サニー援護してくれ」

「ヤダ」

「っておい!!」

思わず突っ込むトリコ

「めんどくせえ」

「面倒ってそんな事言ってる場合じゃないし」

「所詮食うためなら手段を選ばん生物<sup>せいぶつ</sup>生き方に美しさぜんぜんくね?

見た目もあれだし相手する要素0」

「だが肉は珍味倒す価値100だろ!？」

「栄養豊富な？　ないなら価値ゼロオ」

「なら間を取って50だ！　そうだ！　龍！　ジャコウは！？」

「そうだな相手でかいしジャコウ頼めるか？」

ジャコウは一心不乱に黒草を食べている

「・・・わりい食う事に夢中になってる・・・」

「トリコさん！　きてますう！！」

小松君の声でロックドラムの攻撃に気付き後ろに飛びのく

「うおおお！！5連！　釘パンチ！！」

ロックドラムの左手に釘パンチが炸裂し手に大きな穴を開け

ロックドラムは倒れる

「くっ・・・コロシムでの無理が響いてるぜこれ以上の連射はきつい

左手じゃGTロボとの戦いでつかねえしサニーが動いてくれれば・・・」

トリコの際を付きロックドラムは踏み潰そうとするがテリーが素早く反応し

ロックドラムに攻撃を加えて倒す

それを見てテリーに笑顔を向けて喜ぶトリコ

だがテリーに嫉妬しリンが倒れたロックドラムにスーラーリラクデーションを吹き付けようとするが

誤ってバトルフレブランスを掛けてしまい興奮状態になってしまう

リンにひたすら攻撃を食われる

そんな時俺はロックドラムの殻の価値を思い出した

「サニーほら」

「?っん!!!?」

サニーは何かに気付き邪魔だったロックドラムをフライ返しで吹き飛ばす

「こいつは完璧なる美の石! 完美大理石の材料になる!」

「妹より石目当て・・・信じらんないし・・・」

「ははは・・・」

「素材としては何十円としない Pasta だが

料理人の手にかかり美しい皿に盛り付けられる事により  
数千円になるそう皿は食を引き立てる大切なサポーター!

手を加え美しい皿に盛り付けられる事で Pasta の味のランクは上がる!

それは気のせいでもない! いわば合作! 美しさとは調和なんだよ!  
つまり食材のみを求めるなんてナンセンス! 全く持ってえ下劣の極  
みい!

フン・・・解ったかあ 龍以外のお前らあ!?

「って僕達のこと言ってたのお!？」

「さあこれもまた巡り合い共に調和しようかロックドラム?」

ロックドラムはパンチをするが

「美しく散るがいい! フライ返し!」

ロックドラムはまるで自分のパンチを喰らったかのように吹き飛ば

「どお? てめえくパンチ食らった気分は?」

フライ返し

カウンター技

あらゆる物理攻撃は、同じ力で返される

ただし触覚で力を流動させ、相手に返す技であるため、触覚の耐久力を超える力を跳ね返すことはできない

グルメ153時点、サニーの触覚1本あたりの張力は約300?で  
あり

1本でその1000倍までの力を受け流すことが可能。つまり1本  
で最大300トン

触覚30万本をフルに使っても返せる力は9000万トンが限界値

その後もフライ返し、髪<sup>ヘア</sup>ネット、髪<sup>ヘア</sup>ロックを使い  
ロックドラムを倒した

「さっすがサニー　ってジャコウまだ食ってるのか・・・」

あの戦いの中ずっとジャコウは黒草を食べ続けていた



## キャラ紹介

たつがみりゅうと  
龍神龍人

性別 男

年齢 転生前 18歳 転生後 18歳 グルメ界での修行終了時  
了時 25歳

身長 転生前 185cm グルメ界での修行終了時 218cm  
(グルメ界の食材が栄養が豊富だったため)

体重 転生前 69kg グルメ界での修行終了時 98kg 四  
天王の三人より軽い

容姿 上の上 性格が優しいためとてもモテた

だが男子生徒からは嫉妬の目で見られていた

服装は黒い長ズボン、腕や脇腹の部分に赤と黒の龍が描かれている服を愛用している

前世では犯人追跡中のパトカーに轢かれ死亡

神の手によってトリコの世界に転生する

美食屋でもありIGO会長一龍の弟子

二つ名は蛇龍霸王

蛇は相棒であるデーモンデビル大蛇のジャコウから

龍は龍人の名前から

霸王は何故か付いた

四天王であるトリコ、ココ、サニー、ゼブラとは友人関係  
ゼブラとは喧嘩仲間であり親友

ココに占いを進めた人物でもある、ココとは大親友  
サニーとは美しさを語り合う親友

トリコとは頻繁に狩に出たり食い比べをしたりする大親友

武器はスパロボのソウルゲインの腕

二代目研ぎ師メルクに作ってもらった日本刀と斬艦刀

龍人は二刀流であるが斬艦刀は滅多に使用しない

主に二代目メルクに作ってもらった刀『黒刀 覇鎧龍』を使用して  
いる

黒刀 覇鎧龍には竜王デロウスの牙の一部が使われている

因みに二代目メルクに一方的に好意を寄せられている

ノッキングマスター次郎の下でノッキング技術を学ぶ

ノッキングができないユニコーンケルベロスのノッキングに成功す  
るなど

規格外すぎる人物

たつがみ ゆうな  
龍神優奈

性別 女

年齢 転生前 11歳 転生後 13歳 グルメ界での修

行終了時 18歳 現在 20歳

身長 転生前 149cm グルメ界での修行終了時 194cm

(グルメ界の食材が栄養が豊富だったため)

体重 転生前 32kg グルメ界での修行終了時 78kg

容姿 リリカルなのはのフェイト

兄である龍人が死に絶望している中、神に出会い自らもトリコの世

界に向かう

自らも能力を貰いグルメ界で5年間修行し人間界に戻り美食屋になり龍人の情報を集める

2年後にグルメフォーチュンの近くの草原に寝そべっている龍人と再会する

重度のブラコンであり兄である龍人に恋心を抱く

トリコの世界には自分達を兄弟と証明する証拠がないため結婚しても問題ないと考えている

二つ名は女神ヴィーナス

華麗に美しく戦う事からつけられた

武器は愛用しているリボンと小型のノッキングライフル

中、遠戦闘を得意とする

美食屋と言っても調理の腕は凄まじく一龍も認める腕前を誇る

大人しくて少し茶目っ気があるが嘘をつかれるのが嫌い

そのためかゼブラと仲がいい

サニーには美容のいろはを教えてもらったり

ココにはよく占ってもらっている

トリコとは龍人と共に狩に行く

現在は癒しの国ライフで自分の身体に磨きをかけている真っ最中

## ロックドラムに飛ばされて

さて俺は愛刀である『黒刀 覇鎧龍』を使いロックドラムの甲殻を剥いでいる

ただどこいつは軽く振るだけで山どころか海まで割るから優しくやらなければならない

スッ・・・ポロ

甲殻がきれいに取れた

「ふう・・・こんなでいいか？サニー？」

「サンキュ龍」

「おいサニー本当に肉いらね〜のか？」

「そんな栄養なさそうな肉いらね」

「まあサニーらしいな」ドスンドスンドスン！！」「ん？」

大きな音がしたのでそちらを見るとロックドラムが此方に向かって来ていた

「え〜！？ロ、ロックドラム！？」

「サニーが初っ端に吹っ飛ばしたの戻ってきやがった！」

「あああれか」

「あ！バトフレ浴びせた奴！？ツてかぜんぜん元気だし！」

「ノッキングすんの忘れてた」

「」「ええっ！？」「」

「はははは！！！」

俺達はロックドラムに蹴られて別々の方向にふっ飛ばされた俺と小松君とサニーとジャコウトリコとリン

つてかよくジャコウふっ飛ばしたな

「わああああ!!??.」

えゝ俺達は簡単に言うたと落下中です

今のは小松君の声です

うゝん後数十メートルですな

「髪ネット!!」

サニーが受け止めてくれました

「わりいなサニー」

「細か事気にすんなってかロックドラムさすが捕獲レベル27

甘く見ていたまさかマッシュルームウッドまで飛ばされるとは」

「ああまさか油断してたはいえジャコウを吹っ飛ばすとは」

「うわあゝクリーム松茸だ!」

「こつてか復活早!」

クリーム松茸

リーガル島のマッシュルームウッドに生える天然のクリーム松茸は、甘みが全然違う

軽く割いてから焼くと独特の香りがしてクセになる味わい

薄くスライスして刺身で食べるとクセがなく、いくらでも食べられる  
コリコリ、ポリポリと歯ごたえのあるキノコ

>引用<

生息地：多湿な場所（リーガル島・第1ビオトープ「マッシュルームウッド」など）

体長：25cm

体高：-

重さ：1本/700g

価格：1本/8万5千円

松茸独特の香りに加えて、ミルクを思わせるようなクリーミーな味  
わいの担子菌類キジメジ科のキノコ

そのまま食べても甘みがあって美味しいが、軽く焼いて醤油などを  
かけて食べても香ばしさが増して味わい深い

「いや〜天然物のクリーム松茸なんて初めて見ましたよ！  
サニーさん！龍さん！はっ！これは！」

小松君はなにやら草むらに手をつ込むとタコが出てきた

「うわぁ！キモ！」

「ギョルルルル！！！！！！」

サニーとジャコウは思わず引く

「酢ダコですよ樹海を渡り歩く調味料ダコ、オクパソースの一種ビ  
ネダーソース出す酢だこ！」

「美しさマイナス100、キモさ5万！！！」

「はっ！」

小松君は更にタコを見つけ両手、頭、肩に乗せてる

「おっう！！！」

「ギョルルルルルルルル！！！！！！！！！！！」

「ウスターソース出すウスタコにサルサソース出すサルスタコ！  
クリーム松茸に合いそうな醤油ダコもいますよ！」

「な、なんでよりもよってこいつもいるんだ・・・」

因みジャコウがオクパソースから逃げているのは

以前にこいつを食べて腹を壊したからである

それからジャコウはタコが大の苦手になってしまったのだ

## GTロボVS蛇龍霸王

俺は今怒りを感じている

セドルが行った残虐な猛獣殺し

俺はトリコと同じで基本的には食うため以外では殺さない

セドルの行ったことは許せない

だがあいつの事はサニーに任せよう

さて今はリーガルウォールを登ってます

サニーの能力って本当便利だね

俺も触覚使って上ってます

まあ俺の場合髪はそんなに長くないんで10万本なんだけどね  
因みジャコウは下で待ってます

「ん？」

「どした？龍？」

「お出ましたぜ リーガルウォールの主 ヘビークリフ」

ヘビークリフ

リーガルウォールの主

断崖絶壁に横穴を掘って棲みついている

何もしなければ襲ってこないが、怒らせると非常に厄介な相手

捕獲レベル：30

分類：哺乳獣類

「小松君静かにね」

「ハ、ハイイイ」



だがいきなり空が暗くなってきた

「そ、空が暗くなってきましたね・・・雨雲でしょうっか・・・？」

「いや・・・これは・・・！」

「な！」

「なんじゃっこりゃっ！！？？」

落ちてきたのは三ーが捕獲した子マンモスより更に巨大なマンモス

「親マンモスだぁー！！」

「サニーさん！子マンモスの時みたいに持ち上げてください！」

「できるか！ってか無理だ！龍！如何にか出来ないか！？」

「幾らなんでも足場が不安定すぎる！こんなでどうにかし様なんて無理だ！」

そんな中ヘビークリフが出てきた

「あれ？」

「なんか怒ってね？こいつら？」

「ええっ！？怒らせたらヤバイじゃないですか！？」

「なあサニーこいつらこの騒ぎ俺達のせいだと思ってね？」

野生のヘビークリフが襲い掛かってきた！

「思ってる展開じゃねっかこれ！！」

「やばい！ここはいったん回避するぞ！！」

俺たちは触覚を使って逃げる

「逃げましょうサニーさん！龍さん！ぬほほっにっげってっ！！」

「逃げる？フライ返し！！」

襲い掛かってきたヘビークリフをフライ返しで返り討ちにする

「逃げるなんてブサイクな事はしねえ〜ね一旦引くだけさ」

でもまだまだヘビークリフいっぱい

「かも〜す！！MAXで引くけどなあ！！！！くおおおおお！！！！！！！！」

崖を全力疾走！！！！

だけどトリコがナイフで穴を作った

「よおし！行くぞ小松<sup>まつ</sup>！龍！」

「OKってかはやくいくぞおお！！！！」

触覚で崖をはじき穴へと飛び込み

「髪ネット！！！！」

ネットを張りなんとか穴を潰されずにすんだ

「ふう〜って！ヘビークリフ来たあ！！」

そしてココが救援に来てくれ何とか助かった

「ココサンキュ」

「礼ならいいよっていうかなんで体内に行かなかったの？」

「あん？巨大GTロボが2機いんのに俺が居ないでどうする気だよ

？」

トリコ達は既にマンモスの中に向かった  
それに原作とは違い巨大型が2体居やがる  
ピンクに赤

「俺は赤を相手する・・・ジャコウオオ!!」

「ギョッ!アッ!オッ!ギャアッ!!!!!!!」

ジャコウがGTロボの足に巻きつき思いっきり投げ飛ばす

「ココ・・・ここから離れて戦うほうが良いだろ?」

「ああすまない」

「行くぞ・・・霸王の・・・処刑の時間だ・・・」

大きく投げ飛ばされたGTロボのもとに向かう

「ウウ・・・ヤッパリイマノハジャリユウハオウノアイボウ

デーモンデビルオロチノシワザカ・・・」

「・・・対大型猛獣用の巨大型・・・霸王の・・・餌食にしてやる  
よ・・・」

俺は霸鎧龍を引き抜き刃の部位に付いていた血を舐める

「・・・ハオウツトイウヨリ・・・チヲホッスルシニガミダナ・・・

」

「死神か・・・それもまた・・・霸王の顔・・・」

「ピーラーショット!!」

GTロボの体毛に使われている強化アラミド繊維を高速で飛ばし攻

撃してくる

「・・・コーファルス・・・」

左腕で全てのピーラーショットを弾く

「！ステデピーラーショットヲ!?」

「・・・霸鎧龍・・・斬撃・・・」

斬撃を飛ばしGTロボを十字に切りつける

「・・・キシパルス・・・」

「グオオ!」

「・・・装甲を抉っただけか・・・さすがに力をセーブしすぎたか・・・」

「アアン!!ナメテンノカ!セーブシタダト!?!」

「力を出すとこの島を割っちゃうからな」

「ウウ・・・ミキサーパンチ!!」

右腕が高速で回り殴ってくる

「こつやるんだよ・・・玄武剛弾!」

腕を高速回転させそのまま飛ばす

ミキサーと玄武剛弾がぶつかり合い大気が揺れる

「ヌオオオオ!!!バカナ!ジンタイデミキサーイジヨウノコウソクカイトンスルダトオ!!!」

「もう一撃!青龍鱗!」

手にエネルギーをため青龍鱗を放ち腹に直撃させる  
それで体制を崩し玄武剛弾が顔に決まる

「チイイ!!!」

「・・・どうだ？覇王の攻撃の味は？」

「コンガキガアアア!!!!!!」

ダッシュで近づいてくる

「1 / 2 / 3 / 4 / 5 / 6 / 7 / 8 / 9 / 10・・・」

左腕に力を溜める

「てめえを原始レベルまで粉々にしてやるよ・・・  
10連釘パンチイ!!!!!!」

釘パンチを腹に命中させ10回の衝撃が波状的なダメージが襲い  
ボディを粉々にしココの目を上回る俺の目でも目視不可能なまでに  
粉碎した

因みに俺の上限は80連までだ  
滅多に使わんがな

「・・・ココの所に行って飯分けて貰おう」

俺はココの居る地点に向けて歩き出した

## ジュエルミート実食！

現在俺はココとサニーと一緒にキッスが持つてきてくれた水や食料を食べています

俺も行こうと思ったんですけどサニーに美しくないって言われて止められました

そしてマンモスが再び身体を起こし大声を上げる

「バオオオオオ！！！」

「おお毒がついに切れた」

「トリコ達はどうなってる！リンは！？小松は！？」

「信じる事が美しいだろ？」

「そうだぜサニー本当お前は美しい奴だよ」

「バオオオオ！！！」

マンモスは口から何かを吐き出した

「サニー！クッション頼む！」

「おおトリコ！小松君！リンちゃん！」

「あれが・・・」

「ジュエルミート！！」

トリコが右手で持っているのは赤くまるで職人が作り上げたような美しい模様此处からでもおいがする

「うつひょー！！！！最高に優しくキャッチしてやる！髪ネット！！」

キャッチしたは良いがトリコは地面に落ちた

「すげえ・・・これがジュエルミート・・・」  
「おまえなあ！優しくキャッチするって肉の事がよ!?」  
「ん？たりめえだろ」  
「ははは・・・」

この後小松君の言葉でリンちゃんに髪オペレーションで治療するとキスが子マンモスを誘導して連れてきてくれた

「ありがとう古代の食宝よ・・・ん？」  
「バオオオオ！！！」

トリコが礼を言ったらマンモスが足で踏み潰そうとしてきた

「・・・うわああ！！！！?」「」「」  
「まだ怒ってるゝ!!」  
「ジャコウ！テリーとオブサウルスを運んでくれ！いいよな龍!？」  
「オフコース!」  
「ギョルル!」  
「サニー！フライ返した!」  
「此処は毒だろココ!」  
「はははは!」  
「とにかく研究所に帰るぞ!」  
「はい!」  
「ジュエルミート実食だゝ!!」

俺達は騒ぎながら逃げた

・・・そして鈴ちゃんが目覚めついに実食の時  
ウェイターが皿を持ってきて蓋を開けた  
そこにはまるで太陽の様に自ら光を放っている

「ジュエルミート盛りで御座います」

「きたあ！」

「これが・・・ジュエルミート・・・」

「わお」

「月の光が霞んで見えるし！」

「あれだけ巨大なマンモスの体内をこいつが照らしてたんだあたり  
まえか」

「とにかく食べようぜ！」

「「「「この世の全ての食材に感謝をこめていただきます！」」」」  
「」」

「はああ・・・ま、眩しい・・・でも白熱灯のように優しい光だ」

小松君はナイフを入れた

「わあ           肉汁花火が打ち上がった           ！！」

そして口に入れる

「スゴイ・・・見た目はこんなにゴージャスなのに・・・  
全く飾り気のない肉本来の旨みが口いっぱい広がる・・・」

もぐ    コリ

「これは！！   心臓<sup>ハツ</sup>のようなコリコリとした歯ごたえ。  
噛むごとに肉汁がどんどん出てくるけど全然しつこくないぞ」

そして飲み込む  
すると全身が光を発した



「ス・・・スゴイ！！ 全身が光り出した！！  
まるで、細胞1つ1つが、喜びで輝いているみたい！！  
すごいですね！トリコさん！！って超光ってる！！」

「んおつの部位は肝臓だ！ レバ刺しの食感！！  
でも、匂いやクセは全くない！ しつとりとクリーミーな味わいだ  
！！」

「ん       ここはバラ肉の濃厚な味！  
お肉と脂の層が何重にも重なって、口の中でほどけるような食感。  
最高かも、コレ！！」

「おつ、来たぞサーロインだ  
口の中で一瞬で溶けたかなりの脂肪分だが、なめらかで、とても喉  
越しがいいな」

「おおこれは肩肉のしつかりとした歯ごたえ！噛み応えがあつて  
口いっぱい広がるこのエキス！」

「味と食感！ そして部位の・・・カーニバルだな、まるで！！」

「こりゃあ・・・決まりだな・・・」

「今何つつたトリコ？」

「んおつ！！サニーと龍！凄エ輝きだな お前ら！！」

俺とサニーはとんでもない輝きを放っていた

「なあトリコ・・・今何つつたんだよ？」

「なにが？」

「なんか決まりって言ってたな」

「ああこれだけの肉だ・・・入れてもいいかなと思ってよ」

「入れてもいいって何にだ？」

「俺のフルコースの肉料理にさ」

「わあゝ！トリコさん！！」

「賛成ゝ！！」

「ちょ待てゝい！！」

サニーが決まる時に寸止めした

「……なっ……!!?」「……」

「何すんだサニー コラあ!!」

「何すんだじゃねーだろ トリコはやまっちゃいけねーぜ!!」

「はやまってねーよ 別に!!」

「てかオレのこの輝きを見る!!」

「ああ……うん……スゲエな……だから?」

「ジュエルミートは俺を選んだくさくね!!?」

「くさくねって……どーゆー意味?」

「まさか……お兄ちゃん……」

「『宝石の肉』<sup>ジュエルミート</sup>はオレのメインディッシュに決定する!!」

「待てコラっ!!」

「何すんだトリコてめえコラあ!!」

「うるせえ何でお前のメインになんだよ!!」

「オレの方がピカピカしてっからだろが!!」

「ピカピカカンケーねーだろ!!」

「てかそもそもオレのお陰でジュエルミート捕れたっぼくね?

俺が倒したGTロボ(ヤツ)強かったっばいしな」

「なわけあるか!お前寝ボケてっつと10連くらわすぞ コラ!!」

「来いや!はね返してやんよ!!」

「ムグムグ」

「あ……あのーお二人のフルコースにそれぞれ入れたらいいんじゃない……」

「「ならぬっ!!」」

「ど、どして?」

「「なんか嫌だし食材かぶるの!!」」

「何ですかその理由わ

良いじゃないですか別に」

「ならん！ここはプライドにかけてオレの肉料理に！！」

「いや！オレのメインだ！！」

「いや」

「いや」

「ウチはトリコのフルコースに賛成だし」

「うつせゝつぞリン！お前は黙ってる！」

「うつさいのはお兄ちゃんだし」

「食事しようか？龍、小松君」

「だな」

「そうですね」

「ってか少しお土産に貰っていいかな？」

「いいじゃない？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7324v/>

---

トリコ チートを持った転生者

2011年10月14日19時24分発行